



リステラス星圏史略
新資料ファイル
5-0-1



『 始まり の 物語 』

講談社【メフィスト賞】
投稿用！（2019年）



【v i v i】 っ て！ 投稿中止～



霧樹 里守
(きりぎ・りす)

<https://85358.diarynote.jp/201905252251007125/>

『 始まりの物語 』 ... 《 隣地球 》 シリーズ・1 ...

2019年5月25日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

<https://www.youtube.com/watch?v=OrScvs6BHzM>

ユー・レイズ・ミー・アップ【訳詞付】 - ケルティック・ウーマン



=====

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%83%95%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%88%E8%B3%9E>

メフィスト賞

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

メフィスト賞（メフィストしょう）とは、株式会社講談社が発行する文芸雑誌『メフィスト』から生まれた公募文学新人賞である。

沿革と概要

未発表の小説を対象とした新人賞である。特徴としては、対象となるジャンルが『エンタテインメント作品（ミステリー、ファンタジー、SF、伝奇など）[1]』という大まかな区分であること、明確な応募期間が設けられていない[注 1]こと、『メフィスト』の編集者が下読みを介さず直接作品を読んだ上で選考を行うなど、既存の公募文学賞とは異なり持ち込みを制度化したような賞といえる。受賞に値する作品がなかった場合は、次回持ち越しとなるため欠番は発生しない。

『メフィスト』には選考結果だけでなく、座談会形式で編集者が注目した作品が紹介され、受賞に至らないが興味深い作品の場合は応募者とコンタクトを取るとし、それが講談社からのデビューに繋がることもある。また、かつては話題に上らなかったり規定を外れた作品にも1行程度の寸評が必ず掲載されていた[注 2]。

創設当初から賞金は存在しないが、受賞がそのまま出版につながるため印税が賞金代わりとなる。受賞作は基本的に講談社ノベルスで出版されるが、ハードカバーやソフトカバーで出版されたこともある。受賞者には講談社の『江戸川乱歩賞』と同じく[注 3]シャーロック・ホームズ像が進呈される[注 4][2]が、授賞式は行われない[3]。

↑

つまり、「うっかり入選しても、厭離穢土（汚染地・頭狂！）に、

「行かなくて済む！」

...って点で、今までの「うっかり受賞しちゃったら、どうしよう...

「次点（佳作）入選希望！」みたいな、腰の引けてる部分が...ない！

また、第2回受賞者である清涼院流水が2012年に立ち上げた作家の英語圏進出プロジェクト「The BBB」に、森博嗣（第1回）・蘇部健一（第3回）・積木鏡介（第6回）・高田崇史（第9回）・秋月涼介（第20回）・矢野龍王（第30回）らメフィスト賞受賞者が多数参加している[8]。

↑

素晴らしい！（^^）！

創設当初から『究極のエンターテインメント』『面白ければ何でもあり』を標榜しており、第1回受賞者である森博嗣の『すべてがFになる』が『理系ミステリ』と称される理系研究者が活躍する本格ミステリであったのに対し、続く第2回受賞者清涼院流水の『コズミック 世紀末探偵神話』が、ミステリをベースにしつつ既存のジャンルに分類できない奇抜で長大な作品、第3回受賞者蘇部健一の『六枚のとんかつ』は下ネタやギャグが満載されたバカミスの連作短編であるなど、「一作家一ジャンル」と呼ばれるほど個性的な作品が集まるため、受賞作家は「メフィスト賞作家」と呼ばれることもある。

新本格ミステリと奇抜な実験作品が注目される一方で、殊能将之や古処誠二など本格ミステリの書き手や、辻村深月や舞城王太郎のように純文学に近い領域に移る者、西尾維新のようにライトノベルと接近した作品を発表する作家がいる。

受賞者の特徴として、他の職に就きながらデビューしそのまま勤務を続けるケース[注8]や、地方に在住したまま活動を続けるケース[注9]が挙げられる。

2015年までの最年少受賞者は浦賀和宏の19歳。他にも20歳で受賞した佐藤友哉、西尾維新、岡崎隼人、21歳で受賞した清涼院流水や、22歳で受賞した北山猛邦、高里椎奈など、20代でデビューも多い。

逆に最高年齢は丸山天寿の56歳。

↑

...う～しw 目指せ！「最高齢」記録更新ッ！ www （※ 来月55歳）。

(原稿規定)

<http://kodansha-novels.jp/mephisto/manuscript/index.html>

メフィスト賞 原稿募集!

対象： エンタテインメント作品(ミステリー、ファンタジー、SF、伝奇など)。
書き下ろし未発表作品に限ります。

原稿規定

文書作成ソフト等で作成の上、1ページ目にタイトルと作者名を明記。
縦書き、1段組、40字×40行で85～180枚とします。

A4サイズ横位置で、マス目のない用紙に印字。

原稿にはページ番号を入れ、ダブルクリップ等で綴じてください

(綴じきれないものは、分冊可。紐綴じ、ホチキスどめ、のり付けはご遠慮ください)。

梗概規定：原稿とは別紙に以下の事項を明記してください。

- 1.タイトル
- 2.20字前後のキャッチコピー
- 3.800字程度の梗概(あらすじ)
- 4.氏名
- 5.年齢
- 6.性別
- 7.職業
- 8.略歴および賞への応募歴
- 9.住所
- 10.電話番号

- 11.人生で最も影響を受けた小説

宛先： 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
講談社 文芸第三出版部 メフィスト賞原稿募集係

出版： 優秀作品はメフィスト賞とし、講談社より、講談社ノベルス、講談社タイガ、単行本等で刊行します。

その際雑誌掲載権及び著作権は講談社に帰属し、出版に際しては規定の印税を支払います。

その他： 応募原稿は返却いたしません。

また選考結果に関する問い合わせには応じられません。

受け付けた原稿のタイトルは「web メフィスト」上に掲載します（毎月1回20日頃更新）。

出版の可能性のある作品は、編集部よりご連絡いたします。

さて...!

(第 1 稿)
(ほぼ草稿)

『 始まりの物語 』

(リステラス星圏史略・《隣地球》シリーズ・1)

霧樹里守 (きりぎ・りす)

(第1稿)

1.タイトル: 『始まりの物語』...リステラス星圏史略・《隣地球》シリーズ・1...

2.20字前後のキャッチコピー: 「少女は、旅に出る。少年を、追うために...」

3.800字程度の梗概(あらすじ):

4.氏名: ***** (某・有名?脚本家様とは「同姓同名の別人」です。)

5.年齢: 五十五歳。

6.性別: 不詳。戸籍と生物学上は元・巨乳の女性体。本人自覚性は「むしろ男性」。

7.職業: 放浪のフリーター。現在はコールセンター勤務6年目。

8.略歴および賞への応募歴: 昨年2018年から「投稿生活」開始。講談社と星海社に今まで6作応募して全滅中。

(参照⇒ <http://p.booklog.jp/users/masatotoki>)

9.住所: 北海道札幌市*****

10.電話番号: 080-****-****

11.人生で最も影響を受けた小説: 『指輪物語』『銀河英雄伝説』『お嬢さん放浪記』

1. 清瀬律子の物語

1. 清瀬律子の物語

肌は白くて眼は薄茶色。髪は栗色、くねくね曲がる。

清瀬川の谷筋に点在するいくつかの隠れ里に棲む一族は遠い祖先に天狗の血を引くと。

言われていたらしいが、清瀬律子はそのころのことなど知らない。

たしかに律子は色が白い。日に焼けにくくて、髪は明るい色調の天パだ。

天狗じゃなくて、鬼の子孫なんじゃないのと、無口で強情で懐かなくて可愛くない孤児を引き取るハメになった遠縁の小母さんたちからは公然と陰口を叩かれてはいたが。

年齢の近い従姉とは狭い団地の同じ部屋に住んで、実の姉妹同然に仲良くしていたし。

律子は他の親戚たちの言うことなど、あまり気にしていなかった。

そもそも律子は五歳より前の記憶がない。

山火事にまかれて一族すべて、父も母も焼死して、祖母が大やけどを負いながら命懸けで救い出してくれた自分だけが生き残ったのだという話だが。

なにも覚えていないし、思い出せない。

ただ、背中と首筋にいくらか残る火傷の痕だけが見苦しくて、クラスの男児に無神経に嘲笑されたりすることだけが、すこしばかり苦痛だった。

言葉も、喋れない。

五歳で病院で瀕死の祖母と同じ部屋のベッドで目が覚めた時には何も覚えていなかったし、喋ろうとしても、なぜか声が出なかった。

はじめは周囲の大人たちも、山火事の熱と煙を吸い込んだせいで声帯が痛んで声が出せないのだろうと軽く診ていた。そのうち治るだろうと。

それからいくらたっても喋らず、話しかけてもはかばかしい反応も無いので、心肺停止で助け出された時点で脳に不可逆的な損傷と障害が残ったのではないかと、しばらく心配された。

ただ、なぜか、ひらがなだけは書けた。

喉がかわいたときに言葉に出して頼めないのが困って「おみずください」と手近なメモ用紙に書いたら看護婦さんたちにたいそう驚かれた、というのが最初の記憶だ。

隣のベッドで祖母が涙を流した。

祖母だということも、その時はよく解ってはいなかったのだが。

その祖母は数ヶ月の闘病の後、重度熱傷からついに回復することなく息を引き取った。

その間に惜しみなくそそいでもらった愛情と、暖かい言葉と、意味など分からぬままに「ただ聞いておきなさい。人にはけして話さぬように。」と語り教えられた、滅びた一族についてのあやふやな古伝の知識だけが、いまの律子の持つすべての財産だった。

六歳で祖母が亡くなって引き換えのように律子は健康を回復して、退院して父方の伯父の家に引き取られて、従姉と同じ部屋で育った。

その伯父もまもなく事故で亡くなって、遺された妻であり律子とは血のつながりのない伯母は

律子に対して冷たいが、まあそれは多分しかたがないことだろう。

二歳上の従姉がその伯母の足りない愛情の分まで気を使ってくれて、いつも律子と寄り添うように生きていてくれた。

律子は自分は幸せなほうだと思う。

とくに何の不満もない。

=====

=====

同室の、隣のベッドにいる重症のおばあさんが自分の実の祖母だということさえ、その時はまだ、解っていなかったのだが。

危篤と小康状態を何度も繰り返して、暗に安楽死を勧められたことさえあった祖母が、とうとう安心したようにほほえんで息を引き取ったのと引き換えのように律子は健康を回復して退院した。

仕事で海外に行っていた父方の伯父たちがようやく帰国して、律子はその一家に引き取られることになった。

律子自身は何も覚えていない、亡くなった実の父の、年の離れた兄だというその大柄な男の人は、ただ痛まし気に生き残った律子を遠くから眺めるばかりで、どうにも扱いかねているようだった。

血のつながらない義理の伯母であるその妻は、最初からよそよそしく、冷淡だった。

その伯父もまもなく急な事故で亡くなって、伯母からの扱いはますます邪険になったが、それを申しわけながりながら二歳上の従姉が、同じ部屋で実の姉妹のように仲良く暮らしながら、亡くしたらしい母親の代わりに務めるかのように、なにくれとなく気を配り、面倒をみてくれた。

記憶のない律子には、以前の暮らしと比べることすら出来ない。

優しく明るくお喋りで、すこし早とちりでどじなところもある従姉と、枕を並べて手をつないで眠る毎日は、じゅうぶん幸せだと、思った。

その従姉が、遠くの学校の寮に入らなければならなくなる、までは...

*

山火事で記憶と声を失ったあと半年ばかり入院していたらしい律子は、それでもなんとか春には退院して、地元の普通児童校へと入学することが出来た。

喋れない、という支障はあったが、入学前検査の時点ですでにひらがなカタカナと数字と簡単な漢字まで読み書きができた律子の知能はけして低くはないと査定されたし。

カンモクショウ、と説明された律子の症状は、けして一生残るような障害ではなく心の病気で、大人になるまでには自然に治る場合が大半だと、医師やカウンセラーたちが証言してくれたからだ。

教科書の音読だけは出来なかったが質問されれば板書で正確に答えたり、筆談しかできない律子と「喋る」ためにと、幼い級友たちが他の組の児童たちよりも熱心に早く文字を覚えようとしたおかげで、結果として学年内での点数も良くなり、成績向上に役立ったというので、むしろ律子の存在を教師たちは便利がっている側面すらあった。

不思議なことに、意識して話そうとするとどうしても声の出なくなる律子だったが、楽しいことや面白いことがあると、無意識のうちに、声をたててけらけらと明るく笑った。

歌も、歌詞はどうしても無理であったが、ハミングや音程だけなら綺麗な声で歌えた。

早く治るといいねと、言われながらそのまま数年が経った。

律子は、教室のなかで「おとなしいが存在感のある、成績優秀な」児童と評価されながら。

児童学校の四年生にまで進んだ。

さ来年、十一歳になれば、喋れないままで進学できる少年学校がはたしてあるのか、問われることになる。

(ざっくりプロット)

(ざっくりプロット)

【ざっくり年表】（年号）（2019年5月25日）

<https://85358.diarynote.jp/201905252251007125/>

『始まりの物語』 ... 《隣地球》シリーズ・1 ...

2019年5月25日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

<https://www.youtube.com/watch?v=OrScvs6BHzM>

ユー・レイズ・ミー・アップ【訳詞付】 - ケルティック・ウーマン

...さ〜と！

（なかなか、炎神が、かからない...☆）



【ざっくり年表】（年号）

勝亜 約60年

風韻 約30年

緑慶 約15年？

紅賀（滅亡まで？）

清瀬律子 勝亜39年生まれ？

清峰 鋭 勝亜40年に「捨てられていた」。

ってことで...GO！

(1900年代の=本当の=草稿)

(1900年代の=本当の=草稿)

『 序章 ・ すべての始まり 』 (@書いたのは中学～高校.....だと思うが.....着想自体は小学校3～4年!! ☆)

『 序章 ・ すべての始まり 』 (@書いたのは中学～高校.....だと思うが.....着想自体は小学校3～4年!! ☆)

2006年10月20日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

雨だった。窓際に席をもらっているリツコは、さっきから外の景色ばかりを見るときもなしに眺めていた。

とりどりのアジサイの花にぐるりを囲まれた校庭。その、校舎とは反対側にある正門のむこうから、おりしも一台の車が入って来るところだった。

((あ、))

リツコはその車を見つけた時、何か世界が一回転してしまうような不安定な気分になった。連日の雨でこれだけぬかるんでいるのだ、本当なら自動車のタイヤのあとがはっきり残るはずだ。と、言ってもリツコがこの時それに気がついたというわけではなかった。リツコがくらりと来て思わず机にひじを突いてしまったのは——その、わりに大型の自動車の、本当に奇妙な色合いのせいだった。

いつも大人しく座っているだけのリツコが不意に動いたので、隣の席の男の子がどうしたの？という顔でこっちを見る。((あのね、))リツコは手真似で窓の外を見るように云おうとした。

「清峰クン。」 先生の声がする。

「はい。」 隣の子は、別にあわてるでもなく行儀良く立ちあがる。

この間 書いた 工場見学の感想文を順ぐりに返してもらっているところなのだ。

「あなたには漢字や言葉使いのマチガイもないし、字も丁寧で、構成もしっかりしてる。細かいところまでよく調べてあるし、加工行程の合理化案なんてのも考えてあって、先生とても興味深く読ませてもらいました。

ただ、ねえ、先生は感想文って云ったでしょう。前に出してもらった読書感想文の時もそうだったけど、清峰クンの書いてくるのは感想文で云わないの。レポートなのね。.....どうして、面白かった、とか疲れた、だけでもいいから、自分で感じたことを書かないのかな？」

「あの——すみません。でも.....」

男の子が困ったように云いはじめる頃、リツコは例の車の様子が変わったのに気がついていた。ゆっくり走ってそろそろ校舎にたどりつこうかという頃になって、ちょっとかしいだかと思うと止まってしまったのだ。

いや、ちゃんと止まったわけではないようだった。タイヤは回っているし、慌てたように揺れたりかしいだりしている。——よく見ると、その自動車は空中に浮き上がってしまっているみたいだ。

「僕は——」 清峰くんがなおも言いよどんでいると、突然、

ガラッ!!

——激しいいきおいで教室のドアが開いた。

「早く！ 急ぐんだ!!」

黒板のすぐわきで叫んだぼうっと黒っぽい人影は、ドアからかけこんで来たというよりは その場に湧いて出たようにリツコには見えた。

机の列を飛びこえるような勢おいで、2-3歩で教室を横切って来る。

「え、……」

まだ立ったままだった清峰くんは、いきなり腕をつかまれてキョトンとした声をだした。

「あの、……どなたですか？」

「急ぐんだったら!!」

影はひどく切迫している様子だった。

「説明しているヒマはない。今すぐわたしと来るんだ。早く！ もう時間がない。奴らを抑えておけるのはあと少しだ。」

「……あの。ええと——」

迫力負け、というよりは“影”の必死な表情に圧されて少年はもう少しでハイと云いそうになった。と、

「——アノ！ 困ります！」 ようやく気をとりなおした先生がわりこんだ。

「誰ですかあなたは！ どっから入って来たんです?! 今は授業中ですよ。あたしの生徒に手を出さないで下さい!!」

聞きなれた早口に生徒たちも一斉にさわぎはじめる。

「あんただれ!？」

「清峰くんどうしようっていうのよ」

「出てけよ——!!」

騒動が頂点にたっし、そろそろ隣近所のクラスからも廊下に出て様子をうかがうらしい音が聞こえ始めた。と、その時、

グ、ガッ!!—————

耳には何も聞こえなかったのに、みんな頭の中をなぐられたようなショックを感じて立ちすくんだ。それと同時になんだか教室内が暗くなったようなのだ。

天井のライトはまだついたままなのだったが、目に届く前に光と明るさが、どこか別のところへ流れだしていってしまう感じだった。「寒い。」と誰かがつぶやき、普段から頭の良い子とか絵や音楽の得意な子、ユリ・ゲラーごっこにいつも成功する子などは本当に気持ち悪そうにして倒れてしまった。先生があわててそちらの方へすっとんでゆく。

けれど一番てひどいショックを受けたのは例の“影”のようだった。

“影”は妙な音がひびいた瞬間、はじき飛ばされたように机にぶつかって突嗟に少年の腕を放して

しまった。それから二言三言聞きとれないことを叫び——そして、がっくりと膝を折る。

「駄目だ——!! わたしの“力”ではとても足りない！」

ふと思いだしてリツコが窓の外を見ると、さきほどの不審な自動車がピロティの下に消えるところだった。

「——って云わないの、レポートなのね。……どうして——」

((えっ、))

リツコが振りむいた時には、そこはもうまったくいつも通りの授業風景だった。外の雨など知らぬげな明るい室内で、まじめに前を向いている子、熱心に内職をしている子。

「どうしたの？ 清峰クン。聞ってるの？」

生徒あいてにはめったに怒らない、朗らかで優しい先生の声——

「はっ、はい！ でも、あの……」

ガタンと立ち上がったハズミに椅子を蹴倒しそうになり、リツコが突嗟に手を伸ばしてそれをささえた。一瞬、2人の子供の眼が合う。

——きみ、見たんだね——少年の淡い色の瞳が少女に語りかける。

((ええ、)) リツコは首をタテに振った。今日ばかりは赤くなっているヒマもなかった。

と、4時限目の終りをつげるチャイムの音がする。

「あら、もう？ ……今日はやけに早いわね」

先生が腕時計と黒板の上の壁時計を見くらべながら云う。

「起立！」

先生が云い、

「礼!!」

学級委員が云う。

雑然となりかけた教室にドアをノックする音が響き、リツコたちはギクツとして班態形に直そうとしていた机をひっくりかえしてしまった。

「清峰クン。」

用務員のおじさんから用件を聞いていた先生が振りかえって、呼んだ。

「お客さまがおみえだそうよ。先生といっしょにちょっと来てちょうだい。」

倒れた机を直そうと身をかがめていたリツコは、目の前で少年の色白な手がギクリと握られるのに気がついた。

「——……はい。今ですか——……？……」

ぎごちなく云いながら、男の子は先生の云いつけに従った。

リツコはひとりで2人用の木の机をおこし、給食当番なので廊下へ白衣をとりに行った。

『 序章 ・ すべての始まり (2) 』 (@書いたのは中学～ @1982.06.30.)

2006年10月21日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

× × ×

清峰 鋭 (えい) がおとなしく先生についてゆくと校長室の隣の応接室へと招じ入れられた。

「失礼します、うちのクラスの生徒がなにか——」

先に立った先生が校長に尋ねる。

「やア、やア、細貝くん。悪い用件ではないようだよ。こちらの御方が清峰くんに話があるというんだ。」

「小ヶ崎 (おがさき) と申します」

校長と向いあった客人が軽く一礼した。

行儀良く、細貝先生と並んでお辞儀をして腰かけて、初めて目を上げて相手を見たたん——鋭はひどい悪寒を覚えてギュッと目をつぶった。

生徒のそんな様子には気づかないようで、大人3人は型通りの挨拶などを交しあっている。

その男はわりあい小柄で、尊大そうな態度や言葉使いをする反面、ひどく狡猾でいかかわしい雰囲気をもかくし持っているようだ。日に焼けていない黄色い肌に、ひどく分厚い黒ブチ眼鏡をかけて、しきりに唇と舌を突き出すようなしゃべりかたをする。

けれど鋭に、いつかヒルを背中に放りこまれた時のような感じを思いおこさせたのは、どこの町にでもひとりはいそうなその男の陰険さではなかった。

緑色——だと、気がつくまでにはしばらくかかった。その男の着ていた妙なかたちのスーツのことだ。

それはよく見れば自然の葉っぱの色に似せて作ってあるようでいて、やはりまるっきり違った性質をもっているものだった。木々や草の緑があくまでも優しくてしっとり湿っているのにひきかえ、そのスーツの色は毒々しく無味乾燥で、ひどく人為的な感じを与える。

奇妙に目のまわるような形の地模様が織りだしてある。

——先生がたはこのスーツが変なことに気がつかないのかな。

鋭はそっと様子をうかがってみた。2人ともごくあたりまえの顔をしてあたりさわりのない時候の挨拶をとりかわしている。気がついていて礼儀上、表に出さないでいるのとも違うようだ。

コトン。音をたてそうな調子で不意に大人2人は寝入ってしまった。

いつのまにか、男は瞳から妙な圧力を発して鋭を見ていた。鋭はそんな眼つきを以前にも見たことがある。——偶然カエルの群れにいきあたった時の、品定めする、蛇の眼。

「——きみは自分のIQを知っているかね」

ゆっくりと、抑揚の少ないくぐもった声で男は話しはじめた。

「わしは Dr.小ヶ崎。J.E.S.S.——国立科学者養成センターの独立研究者じゃ。ふむ、まあ、教授だと思っというてもらおう。」

その声を聞いているうちに Dr. とやらが見かけより歳をとっているらしいことがわかってきた。それに、このまま彼の眼を見つづけてはいけないということも。

鋭は必死になって視線をそらそうとする。どちらかといえば半そで一枚では肌寒いような梅雨の季節なのに、じっとりと額が湿ってくる。体はぴくりとも動かない。

ヘンだな——鋭はいぶかしみ始めていた。催眠術かなにかだろうか？

校長も担任も、すっかり寝入ってしまっている。

「J.E.S.S.——わしらは単に《センター》と呼んでおるが——のことはきみも知っておるじゃろう。例の、国立科・技開発研究所の附属機関として一昨年設立されたヤツじゃ。

この際、面倒な前置きは抜きにするとしよう。わしらの計算によればきみのIQは推定260、科学的方面に著しい興味および特性が見られる。……どうじゃね、《センター》へ来ないかね？」

今は小ヶ崎教授の不気味に細められた両眼からは手っ取り早く素直にうんと言わせてしまおうという圧力が放射されていた。

先刻の騒ぎの際に例の“影”からうけたものとはまったく異なる圧迫感だった。“影”のそれがたちば的に相手より弱いものの必死さから来ていたのにひきかえ、今、鋭がうけているのは、「おまえなどわしにかなう筈もないのだ」——という、男の絶対的な自信が裏がえったものだ。

「え、——あの——……」

けれどついに、少年の好奇心が他のすべてに勝ってしまった。

「科学やS・Fがとても好きなのは確かですけど、僕の知能指数がそんなに高いなんてことがどうして解るんです？ それに第一、僕のことをどこで知ったんですか？ 今、先生方が眠ってしまってらっしゃるように見えるのは、これは催眠術かなにかの一種なんですか？ ……だとしたらどうやって——……」

ひとたびアゴを押えつけていた圧力をどこかへやってしまうと、あとは実にスラスラと言葉が口をついて出た。まだ手足の先にはしびれに似た感覚が残っていたがそんなことは何でもなし。この、10歳にもならぬ、小柄で大人らしい行儀の良い少年にとって、好奇心——というか向学心、興味を満足させたいという欲求——は唯一、日頃の理性をふっとばさせるシロモノだったのだ。何度注意されても、疑問点をひとつ見つけたとなると次から次へ、得心のゆくまで一時に質問し続ける、という悪癖は一向になおらない。

一度言われたことは二度と注意されずに従がう、この子供にとっては非常に珍しいことである。

((——う。……))

顔にも、声にも、態度には一切あらわさなかったが、小ヶ崎“教授”は内心かなりの衝撃をうけていた。

心理といえばS・Fまがいのパラ・サイコロジー (※) にしか今のところ興味を示していない鋭には知るよしもなかったが、ドクター・オガサキと云えば知る人ぞ知る催眠技術の権威である。

その彼の施術を、破るための専門知識はおろか“破る”という自覚をさえ持たずにこの少年は解いてしまった。……小ヶ崎にしてみればはるか昔の未熟なインターン時代以来はじめての事である。((これは。)) 彼は思った。

一般的にはたで聞こえているほどこの小ヶ崎という男は狭量ではない。それは彼の唯我独尊ともいうべき自尊心がなまなかなことでは揺るぎもしないせいでもあったが、むしろ、ちょっとした理由から気に入ってしまったものにはその是非を問わず肩入れをする、半ば以上マッド・サイエンティストじみた身びいきの強さが見られた。老人にありがちな偏執狂の匂いがあるのである。——もっとも彼は外面的にはさほど歳をとっているとも思えないのだが。

「それは」

コンマ何秒かの沈黙のあと、小ヶ崎は再び自信に満ちて話し始めた。

梅雨どきの薄暗い部屋の中には冷気がこもり、そのせいで小ヶ崎はかなり不快なおもいをして
いるらしかった。

かすかにカビ臭い応接室の雰囲気。窓の外には例の、教授のスーツと同じ色の大型車が見える。

雨はますます激しく、その校舎や大地にぶちあたる轟音は、ともすれば男のしわがれた話し声
をかき消してしまうまでになっていった。……

※ パラ・サイコロジー : 超心理学。

要するに超能力を科学的に解明しようというもの。

『 序章 ・ すべての始まり (3) 』 (@書いたのは中学～高校……だと思
うが……着想自体は小学校3～4年!! ☆)

『 序章 ・ すべての始まり (3) 』 (@書いたのは中学～高校……だと思
うが……着想
自体は小学校3～4年!! ☆)

2006年10月22日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

「ここだ、ここだよ、市立『尊臣（とうとおみ）』第2小学校。可能性の最後の1人がいるところだ。」

すっぽりかぶったレインコートのフードで髪を隠して、双子の片われが快活に走って戻って来た。あまり目立たぬようにと、あとの連中は角をまわった植えこみの陰で待っていたのである。

「いま何時？ 12:35か、昼食中だね。この学校ひる休み何分からだろ。」

背の高い黒髪そばかすの少年が防水のデジタル時計をのぞきこむ。

「昼休みはやっぱマズいんじゃない？ 校内はいるのはサ」

「相手の都合もあるだろうし……第一めだつわ。」

そういう彼らにしてからが、登校中であるべき小学生である。

彼ら6人は学校の角の、紫陽花の大株と大株の間の奥まった所に集まっているのだった。アジサイの生け垣は、不思議なことに校庭の鉄柵の外側にあるのだ。

「なんか気に入くないんです、る。この学校、どうも嫌な“気”がよどんでいるみたいですよ。」

柵ごしに校内をのぞきこんでいた、一番小さい子が戻って来てそう報告する。

「なに、おミソ。どういうこと」

年長の勝ち気そうな少女が聞きかえす。“おミソ”と呼ばれた子はモジモジして風がわりなマントのフードをますます深くひきおろす。

「よし。」

リーダーとおぼしき黒髪の少年が云った。

「雨もひどいし、食事して、さっき見た市立図書館で時間つぶそうよ。……放課後まちぶせすればいい」

わーい！ 双児が歓声をあげ、もう1人の男の子がしみじみとつぶやいた。

「助かったァ、ミーちゃんもう毛なみがぐしょぐしょヨオ☆」

女の子が長い髪をなびかせて笑い声をあげる。それほどまでにこの年の梅雨はひどいものなのだ……

leader 黒髪、そばかす → のっぽ (黒ずみ)
twin 金髪ロールヘア マーク・エンゲル・レッドフラッグ
金髪ストレート レーニ・ポリシェ・レッドフラッグ
a girl 黒髪ローレ色白 ゆりや

塔遠見

尊御々

2006年10月23日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

机を直したりなんだりでいっとう遅くなってしまったリツコは、思い牛乳びんのケースを一人で運び上げなければならなかった。

5時限目は音楽で、音楽室へ移動して音楽の先生の授業だった。6時限目、教室へ戻ってしばらくしてから細貝先生はあらわれなかった。生徒たちがみんなして騒ぎはじめた頃になって5組の楠本先生が来て、4組は自習だから帰ってもいいと云った。

みんないなくなってしまうてもリツコは帰らなかった。楠本先生にきけば何か教えてくれるかもしれなかったが、リツコは男の大人の人はどうも苦手で、話しに行くのが恐いのだった。

あっというまに学級文庫の『世界の名作』シリーズ、残り3巻を読み終ってしまう。はっと気がつくとも外はもう暗く、西の方の雲が少し切れて赤い光がさしこんでいた。雨がやんだのだ。時計を見ると6時45分。とうに門限を過ぎていた。……また食事ヌキだ。

((まァいいや。))

リツコは少し首をかしげて考えた。清峰くんはどうしちゃったって言うのかな。細貝先生だって毎日下校時には、いのこっている生徒を帰すために（たいていの場合リツコ1人だったが、）教室へ見まわりに来るはずなのだ。

((おかしいな。今日はおかしいことばかり。))

首を振ってリツコは教室の中を見わたした。それから校庭を。もう一度室内を。

何がいつもと違うというわけではなかったが、やはり何かが見慣れた世界とは喰いちがってしまっているのだった。それともそれは今までもずっとあったもので、ただリツコが気づかずにいただけかも知れない。

危険、とか不気味、とか云うのではなく、ただ何かしらあやしくて、間違った、あってはいけないような雰囲気ぴったりとあたりをとりまいているのだ。

すぐに真っ暗になってしまったが、別に電気をつけたいとも思わなかった。昔から不思議と暗闇を恐がらない子供だったのだ。お腹がすいたけれどそれも慣れていた。清峰くんの席から上着と（鋭はいつでも非常に準備の良い子だ。）枕がわりにザブトンを借りると、リツコは机の上につっぷしてそのまま寝入ってしまった。

翌朝、朝一番の光で目が覚めると5時10分前だった。そうすると清峰くんも先生もついに戻ってこなかったらしい。戻って来てもしリツコを見つければ、先生なら大慌てで送って行ってくれるだろうし清峰くんなら自分の所へ泊めてくれるだろう。リツコはあくびをし、寝ちがえてしまった首をぐるぐるまわした。

どうりで一晩中風の音がうるさいように感じたわけで、窓の外はすっかり晴れてしまっていた。よい天気だ。

((夏が来たのね.....))

なんとはなし そんな風を感じながら清峰クンの荷物と自分のとをまとめ——今日はもう学校へは戻って来ないつもりだった。それどころではない気がするの。——ザブトンをもとにかえし、上着は羽織ったままリツコはそっと学校を出た。校門はもちろん3ヶ所とも閉まっているが、鉄柵が子供1人抜けられるくらいの幅で壊れている所を知っていたのだ。

一旦ある場所へ寄って隠してあるお財布を持ちだしてき、一軒だけ開いていた牛乳販売店でパンと牛乳を買う。おばさんになんだという顔をされたけれど別に気にもとめなかった。

公園で朝食を済ませる。午前5時31分。

それからリツコはてくてくと街はずれへ向って歩きはじめた。

濡れたまんまのバス停のベンチで始発の時間を待つよりも、リツコはこの道をのんびり歩いてゆくのが好きだった。

朝まだきの白っぽく明るい光のなか、まだ古びていない舗装道路の両脇に新旧とりまぜて小ぎれいな住宅街。朝もや、朝露、なごりの雨滴に虹の色どりをそえられて、紫陽花、緑樹、バラの花などが歩道にのりださんばかりに生き生きと息づいている。

駅前広場へ通じる国道との交差点を通りすぎて、右へ左へゆるくカーブをえがきながら道は続いてゆく。市街地を外れ果樹林とわずかばかりの段々畑を抜け、となり町との境にあるゆるやかにうねるような山地にさしかかるあたり、リツコの道はバス道路からそれて美しい林のなかへわけ入っていった。

鳥の音がする、葉ずれの音がする。ひいやりと心持ちうす暗く涼しい木立ちのなか、雨続きで表土をすっかりはぎとられた黄土色の小径が、山頂へと登っている。車のわたちの跡が小川になっている。

澄んだ黄金色の光が雑木林の中へとさしこみ始めていた。少女の行く手で紗幕——とばり——をひくかのように朝の白い化粧着（ガウン）が姿を消してゆく。

鳥の音がする。蝶がとんでゆく。

みどりの空気のなか

すでに小一時間ほども歩いていたがリツコは一向に疲れた様子を見せなかった。むしろ小気味よく息をはずませ、頬を紅潮させて急勾配の坂をはずむように登ってゆく。山頂が近い。特に枝の繁ったやぶのわきを抜けると目的の場所が見おろせた。清峰鋭のいる、聖光愛育園。キリスト教系の私設孤児院である。自然に足が速くなる。

と、その時、眼下の溪流の勢いのよい響きにまじって、どこかすぐ近くから人の話し声めいたものが聞こえてきた。

((え、))

リツコが足を止めるのと、

「ほお～～～、ほけきよ！」

間の抜けた鳴きマネと共にヒョロツとした男の子が道の真ん中に飛び出して来るのが、ほとんど同時だった。

ふみァお～～～!! 男の子は今度はネコのまねをした。ウグイスに比べればはるかに堂に入っていて、身振りも加えて警戒する時の猫の感じが実によく出ている。

ヒョロツとして見えると云ってもそれはむしろ痩せているせいで、実際にはそう背が高いわけでもなく、歳も、せいぜい2つか3つリツコより上というぐらいのようだった。リツコは安心して、少し微笑った。

「なんだなんだ」

「なによ、へったくそな合い図ね」

男の子が飛び出して来た（正確には斜め上くらいの木の枝から飛び降りて来たのだったが）側のやぶ陰から、さらに何人かの子供たちがドヤドヤとかけ出して来た。

「どうした、登校時間にはまだ早いだろ。それとももう——」

しんがりになった背の高い男の子が、リツコを見つけてひどく慌てた顔をした。「誰だい、その子」

「ミーちゃん知ってるワケがないんだもんネ」

「どっちから来たのよ」

「逆ホーコー」

「みはりィ～～～、発見が遅いじゃないか！」

まあまあよ、とか云って背の高い大人っぽい男の子を中心にワヤワヤと何やら相談し始めるのを、リツコはキョトンとした面持ちで傍観していた。

彼ら6人の子供たちは、議題にされている少女には知るべくもないが、昨日小学校脇のアジサイの陰に集まっていた例の連中である。

「きみ、名前は？」

すぐに意見はまとまったらしく、6人はリツコの方へ振りかえった。

((あの、……))

「ダメよオ！ 礼儀しらず。」

リツコがあいまいに笑ってすぐには答えないのを見て、すらりとした体つきのカッコ良い女の子が質問した子を叱りとばす。

「ヒトに名前きく時はまず先に自己しよーかいするもんだって学校で習ったでしよーが。」

それから、

「あのね、あたし、ゆりや。こっちのコが“ノッポ”ってってあたし達（ら）の班のリーダーなんだ。で、そっちが“ふたご”のマークとレーニ。後ろにいるのが、ミーとおミソ。あたしたち、ちょっとワケがあって、あそこの——（と、あいまいに手を振って聖光愛育園の赤い屋根を示し、）——キヨミネ、って子が登校するのを待ち伏せしてるんだ」

[『 序章 ・ すべての始まり \(5\) 』 \(@1982.07.06.\)](#)

2006年10月24日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

× × ×

その日の午後と夜と次の日の午前中いっぱい、囚人護送車のような造りのその大型自動車は休みなく走り続けた。鋭は頑丈な後部荷台その間中ひとりで乗せられていた。

ひとりぼっちが淋しくて怖い、などという殊勝な子供では最初っからなかったし、本を持ちこんでいたので退屈もしなかったけれど、夜も毛布一枚でそこに寝かされたのには閉口した。なにしろ走り続ける自動車の中の、固くて狭い作りつけのベンチの上だったのだ。揺れは比較的少なかったとはいえ夜中に確実に2回はころがり落ちた。

結局、目がさめてみると床の上にじかに寝ていた。

いつかの夏休みに川原にテントを張った時のことを思い出す。

「う～～～……」

食事はさし入れられたトイレには2時間おきの小休止があった。

けれど、歯ミガキも着替えも洗顔もなしだったのでひどく不潔な気がして具合が悪かった。風邪をひいてしまったようでもあった。

「着いたぞ。」

朝食からだいぶんたってそろそろまた空腹を感じだしていた頃、車が停ったと思うとヘンにピカピカする緑色の制服を着た男たちが鋭をおろしに来た。緑の服——小ヶ崎教授の奇妙な背広と同じ、人工的でよくよく見るうちに背中が粟だってきてしまいそうなヤツである。ただ地紋はなく、織ってあるものなのにまるでビニール布のようなテラテラした光沢。

「独立研究者（ドクター）・小ヶ崎は他に急用ができたのでこのまま外部に出向かれる。おまえは正面に見えるあの白い4階建ての棟に行くように。連絡は既についている。これが通行証だ。

ゲートでこれを見せればすぐに迎えの者が出るよう手筈がついている。では。」

他の2人より階級が上であるらしい制服の男が、口早にそれだけ云ってまたすぐ運転台に戻った。

「あ・ありが——……」

鋭が礼を云う暇もなく、残り2名の隊員をも乗せて、制服や背広と同じ緑色をした車は走り去って行った。

リツコがいれば その車が昨日校庭に乗り入れてきたあの大型車と同じものだとすぐに気がついたことだろう。

ともあれ、何が起こったのか、何が起ころうとしているのか……？

そんな事柄にはまったく気づかぬげに、鋭は、教えられた白い建物へと素直に歩きはじめた。

ときに19××年6月末日。気象庁は例年より幾分早く、激しかった今年の梅雨がすでにあけたこと

を宣言した。

『 (無題) 』 (@小学校or中学校)

[『 \(無題\) 』 \(@小学校or中学校\)](#)

2006年10月27日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\) コメント \(1\)](#)

昔々はあるかな昔、僕がまだ本当に幼かった頃。そうあれは小学校の3年だ。孤児院にいた僕の所へ、緑色の護衛を二人つれて白い服の男が緑の服でやって来た。

その白い奴は妙に高圧な態度で院長先生を呼びつけて、話をしながら蛇そのものの目付でこっちをじろじろ見るんだな。

(あ、こいつは気に食わないな)

僕は一目でピンと来たよ。

だけどそいつが持って来た話は魅力的だった。

(前哨線)

二、

清峰鋭 (きよみね・えい) は捨て児でした。

秋の終りの冷たく澄んだ朝、泣きもせずじっと空を見上げていた赤ん坊を、見つけてくれたのは院長先生です。

一目で混血児 (ハーフ) とわかる顔だちと、貧しいけれど一針一針の細かい手縫いの産着の「A」の縫い取り。

利発そうな瞳をしているからと、てっとり早く頭文字に漢字をあてて、始め彼には鋭子という名前がつけられたそうです。無論おしめを替える段になって、慌てて下の一字は取り払われたのですが。

とにかく一目見て誰もが女の子だと信じ込んでしまう程の透けるような美しさと、理知的とでも言うべき瞳の光を持った、珍しい赤ん坊ではありました。

名前にふさわしく、彼が類い稀な高度な知能を持って生まれた事に周囲の人間が気づき始めたのは、彼鋭が小学校へ入学した頃でした。

入学時の知能検査でIQ300という数値がはじきだされた時にはまさかと笑って130の間違いであろうと考えていた大人たちも、どこで字を覚えたものか一年坊主が生意気に大人の新聞を読み始め、稚拙ながらもかなりまともな「見解」を熱心に話すようになった時、“これは！”と思ったそうです。

彼の興味は最初からもっぱら科学に向けられていたらしく、童話や絵本の変わりに難解なSF小説を読みあさり、近所の大学生の所へ入りびたっては、相対性理論やら万有引力やらを聞きかじって帰るようになりました。

彼の夢は科学者となり大宇宙船を建造する事。

そしてそれが災厄をまねいたのです！

その男がやって来た時、園庭で鉄棒をしていた鋭は一目で不吉なものを感じとった。

それがどこから来るものだったか。

もしかしたらそいつの蛇のようなてらてらと光を反射させる眼に原因があったのかも知れないが、なにも世界中に蛇眼が奴一人しかいないわけではなし、わけのわからない異様な恐怖を感じた事の方に、かえって鋭は疑問を感じた。

そう、何かを恐れる必要などありはしなかったのだ。

男は設立されたばかりの国立科学者養成センターの事務官の一人であり、IQ300という類い稀な知能を有している鋭を、全額支給の特待生という形で編入させたいと申し入れて来たのだ。

願ってもないこと。

科学だけが目的の孤児である鋭にとっては、正に福音の鐘の調べのような話である。

否も応もなく鋭は承知し、

「では明後日。」

迎えをよこすと言って男は帰って行った。

鋭は降って湧いた幸運に日頃からの成人顔負けの冷静な洞察力を失って、帰り際に男の見せた不吉な笑いにも気づく事なく、ただ彼を我が子同様にかわいがってくれた孤児院の院長だけが、苦渋に満ちた青い顔をして凝っと額を押さえていた。

2006年10月15日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

1. その男

その男がやって来たのは僕がちょうど小学校の4年生だった時の19xx年の夏休み、7月31日のことだった。男は痩せぎすで、眼つきが変に鋭く、セミの声が一面にやかましいほど響きわたっている中でダークスーツの三つ揃いを着こんで更にその上から目が痛くなるほどのバリバリの白衣を羽織っている。

その一見して科学者か医学教授と解る男がボディガードを従えて園の前の砂利道を歩いてやって来た時、鋭(えい)はちょうど門の前の木陰に店をひろげてハンドメイドのラジコンに挑戦していた。

無論、設計図から自分で引いたのだ。

「——きみが清峰 鋭 (きよみね・えい) 君かね、坊や」

男が僕の目の前で立ち止まる。

「そうですけど」

「自分のIQを知っているかね、きみは」

「

」

何か用かと鋭は云ってやりたかった。なんでこいつは僕のことを知っているんだろう、どこか気に入らないところのある人だけだ。

しかし鋭は年長の者には礼儀正しくしなければいけないと園長先生に注意されたばかりだったし、はんだづけが一刻も気の抜けない所にさしかかったせいもあって、尋ねられた通りに大人しく園長先生の居所を教えて再びラジコンの方に注意を戻した。

鋭、清峰 鋭-10歳。この時まだ小学校の4年生である。へその緒も取れるか取れないかという頃に雪の積もった門の前で拾われて、以来ずっとこの青光愛育園で育てられている。

一目見て欧亜混血児らしいと知れる美しい顔だちの子供である。真っ直ぐで素直な髪も、そっくり同じ色合いの瞳も、やわらかく明るい薄茶色、肌は少し陽に焼けて、内側から光が透けてみえるような淡い象牙色に輝いている。ただ、その表情だけはいかにも子供こどもした可愛らしさにはおよそ遠く、みごとなオデコやよく動く大きな目でさえが、見かけ以上に大人びている少年の頭脳的な性格の方をより一層良く表現していた。

数10分か、それとも1～2時間は経ったのだろうか。鋭が一段落終えてさあ川へ泳ぎに行こうと

思いつつなんとはなしにぐずぐずしていると案の定園長室の方から奥さん先生が呼びに来て、何か緊張した顔でお客さんの話を聞きに行くようにと告げた。

勘が当たったな、少年はそう思いながら——彼の予感はいつでも大抵的中するのだが——少年は漠然とそう思いながら敏捷に立ち上がり、散らばしたままの部品の山にちらりと一瞥をくれて落ちつかない原因へと歩きだした。

雑木林の上に純白の積乱雲が盛り上がっている。____ゼミが泣き止んで、今は____ゼミがうるさく____と騒ぎ始めていた。

「——きて。きみはきみ自身の能力を知っている。わしはきみの好みや考えを傾向として知っておるつもりだ。そこで——じゃ、つまらん前置きは抜きにしましょう。

きみは国立科技研究所について何か聞いていることがあるかね」

案に相違して園長先生が席を外してしまっている部屋の中で、男は鋭が腰をかけるなり睨めつけるようにして話し始めた。

「科技研——わしらは単に“センター”と称しておるが、数年前に設立されたばかりの国立科学技術開発研究所のことじゃ。これは世間にもあまり知られていないことじゃが、ただ国立と言うてもこれは政府の直轄になっておってな、設備資金面研究内容共にその充実度は他の弱小研究所群に較ぶべくもない」

男——その話し振りから見かけよりははるかに年寄りであることが知れる——は続けてその科技研とやらの具体的なアウトライン、敷地面積・年間予算額等を列挙してみせたが、それは“他の弱小——”を知らない鋭にも容易にその秀度を理解できる内容を示していた。

研究所と云うよりは、むしろ何かの基地であると形容した方がふさわしい。

「研究者にはどんな人がいるんですか？ 僕は近所にいる大学生のおかげで普通の科学雑誌だけでなく各学会の会報なんかも良く読ませてもらっているけど、それだけの規模を誇る研究所にしては何の記事も見ただ覚えがないですね」

仕付けられてきた通りに行儀よく腰をおろしている奇妙に冷静な眼をした少年が、やはり仕付けられた通りに丁寧な質問を返す。少し開いた膝の上にきちんと両手を組み、背筋を良く伸して、対峙している大の大人の尊大さにも負けない落ちつきぶりである。それでも一応興味を引かれてはいるのだろう、心持ち前に乗り出して、熱心に科学者からの答を待っていた。

「わしらの予測通り、なかなか抜け目のない性格のようじゃな」

男が、それこそ抜け目の一片も無さそうな双眼を満足げに光らせる。

「名を挙げてみたところで君は知らんじゃろう。指摘の通り、わしらは——左様、一般の学会とは殆ど関係を持たずにやっておる。何故なら我々の知識・技術は彼方と比較すべくもなく発達しておるし、“センター”の豊富な予算は他の研究施設との協同を必要とせん。多岐にわたる研究部門が相互に協力しあうこともできるしな。実際、“センター”がここ数年に仕遂げた業績を一般学会の輩が嗅ぎつけた日には、わしらは賞よりもまず混乱と反論、難と____を受けることになるじゃろうよ。

それが何よりもまず____という原始的な感情に基づいたものであることは疑うまでもないが。」

「『センター』は、~~わしも含む30余名の独立研究者によって運営されておる。独立研究者は各々多岐に渡る学識と研究分野を持ち、~~

いつの間にか窓の外には積乱雲が発達し、一人の老科学者と一人の子供のいる清潔だが擦り切れた感じのする室内は薄暗くなりつつあった。

遠くで雷の音がしている。

男は更に生物科学、原子物理学、宇宙工学等、《センター》における研究分野とその研究課題を説明し、概略が握めたかと尋ねた。「ええ」鋭はうなづく。

「では本題に入ることにしよう。

わしらは——つまり《センター》における主要な研究者たちの事じゃが——は、ここ数年各部門の共同研究として、心理学・電子工学・生化学などを基盤に教育科学とも云うべき新分野を開発しつつある。

今や理論的には9分通りの完成を見たと言ってよいのじゃが、未だ実験データが足らん。とりわけ高知能児における専門教育課程がどの程度効果を上げ得るかについての——な。それというのも、IQ250以上・指導者による早期教育を施されていない学齢以上12歳以下の子供、という条件にあてはまる者が、殆ど見つからぬからじゃ

男は話す間中ひとときも目をそらさずに鋭の表情を観察していたのだが、しばらく言葉を切って巧みに誘いをかけてみても少年からの反応は何ひとつ得られなかった。無論、その頭脳の卓抜さからして科学者の云わんとしている事を悟っていない筈がないのであるが、見事に自制し切って眉ひとつ動かさない。

~~わずか10歳の子供にして、これは恐るべき精神力だった。~~

ややあって、少年はわずか10歳の子供とはとても思えない、奇妙に疲れ切ったような重々しさをゆっくりと立ち上がった。そのまま戸口の脇の、電気のスイッチの方へ歩いて行く。雷鳴がすぐ近くまでせまり、世界は暗く蒸し暑く耐え難い程になっていた。

電気をつける。

鋭は今、男に背を向けて立ちつくしていた。

カッ！ と一瞬、部屋の外が青く白く輝やき、空気をつんざいて音が光を追う。

「僕をモルモットにしたいというわけですか」

美しいボーイ・ソプラノは、しかし震えたり怖えたりする気配もなく、むしろ悠然として事態を楽しんでいる感があった。「僕の方にメリットは？」

内心の動揺を 覚えた のは老獪な科学者の方だった。

「——ふん。……まず第一に、~~正規の科学教育が受けられる。それも最高・最新の内容と方法でじゃ。第二に、まず第1に、~~思うような結果が得られるか否かに関ず、わしらは十分な額を礼金として支払う気である。第2にきみは卓越した指導者陣の管理のもとで正規の科学教育をうけることができる。それも最新・最高の方法と内容でじゃ。加えて希望通りの実験成功が得られた場合には、きみは実験終了と共に、特に優れた研究者の一人として《センター》に迎え入れられる事になっておる。」

「——……“正規の科学教育”ですか。あなたは僕の弱点をご存じなんですね。他の2つは後で考

えることにするとしても」

苦笑しながら振り向いて鋭は言った。

「もう一つ質問をいいですか？ 僕のことをどこで調べたんです？ 僕はマスコミとかに名前が載るようなことはしてないし、学校の成績も中の上より上には行かないように気をつけてました。僕があなたの云う高知能児——そういつて良ければだけど——だということをはっきり知っているのは、園の先生達とさっき話した近所の大学院生だけの筈なんです。」

「5月の——表向きは文部省主催ということになっている……」

「ああ、あのIQテストですか？ でもあれはちゃんと、113になるように計算して——……」

「手を抜くべきではなかったな」

男は、鋭の反応の早さを喜ぶような、憎むような、奇妙にゆっくりした言いまわしで一言云った。

「あれの出題と解析は実は《センター》によるものだったのじゃ。あれだけ明確な解答パターンは、単なる偶然から出てくるものではない」

「しばらく、考えさせて下さい」

男が無言のまま立ち去ってゆくと、先ほどの威厳はどこへやら、まだわずか10歳のか細く華奢な少年は全身の力が抜けてしまったかのように手近な椅子に座りこんだ。ドアの外で心配げな院長の声と横柄な——言葉こそ丁寧だがハナから相手を見下しているとはっきり解る——男の声とがなにやら言い交わすのが聞こえ、やがて二人の護衛を従えて帰ってゆくらしい気配。

雨が降り始めたようである。

それでも鋭は両手に顔をうずめたままじっと座り続けていた。

コンコン、と遠慮がちなノックの音。しかしドアを開けて入って来た院長の目に入ったのは、いかにも分別臭そうな顔にちらりと茶目っ気のある笑顔を浮かべて、

「どうぞ」と大人のように椅子を指し示す、いつもの通りの少年の姿だった。

「あの人と何を話してたんですか？」

「一週間したらまた来ると言っていた。来る気があるならそれまでに荷物をまとめておくようにと。鋭——きみは、行きたいのかね？」

「はい——たぶん。なんでそんな顔をしてるんです、院長先生まっ青ですよ」

「あの男は——その——何と言ったか、きみを連れて行きたいと言っていた施設の事を、“日本のNASAのようなもの”と表現していたよ……いや、それはともかくとして、わたしはきみを朝日ヶ森学園へ遣りたいと思っていた……。鋭、考え直してくれないかね……」

予想外な院長の態度に鋭はわずかにたじろいでいた。蒼白になった顔に、ほとんど悲痛とも云うべき表情を浮かべて話しかけてくる。

「朝日ヶ森……ああ、あの、全額免除の奨学制度があるとかいう学校ですか？ 先生が昔、通ってた。でも、そこは確か文化系の授業が中心なんでしょう。僕——僕は、科学者になりたい

と思っているし——そりゃ……でも……」

少年はもごもごと口ごもると下を向いてしまった。それはいつでも大人顔負けにきちんと話す彼にしてはとても珍しい事だったが、なぜか怖えているとさえ思える院長にはそれに気づく余裕がないようである。

「それになぜ、“NASAのような施設”というのがいけないんですか？ NASAは宇宙開発にかけてはずい分進んでいるし、宇宙工学っていうのは僕が一番やりたいと思ってる分野です」

話をわざとそらすように口早にしゃべってしまうと、顔を背けるように立ち上がった鋭は「失礼します」とも言わずに部屋から出ていった。

廊下のつきあたりから一步外へ踏みだそうとするといつの間にやら激しい夕立ちが降り始めていた。鋭はけぶりたっている雨をすかして先刻までいた門の脇の木立ちを見る。——どうやら、誰も鋭のラジコンの存在に気がついてはくれなかったようだ。きびすを返して自分の部屋へ戻る。

。来月のお誕生会でプレゼントにしようと思っていたのだが、どのみち一週間では仕上がらないだろう。

古くなった蛍光灯がみすぼらしい調度類を照らしだしている。

院長は窓わくにしがみつки、声にならないうめき声で何事かつぶやきながら我を忘れてすすり上げていた。

院長夫人である“奥さん先生”が1人娘の三重子を抱いて静かに入ってきた。

今年3歳になる三重子の胸部には、たくみに整形された手術の後が3回分、薄桃色になってまだかすかに残っている。

。

マーリエ・エンゲル

レーニ・ポリシェ

能力開発研究所（→広辞苑）

＞ 特殊能力開発研究所（特研）

独立研究者（30余）

『 3. 夢 その1 』 (@中学2年～高校3年のどこか。)

『 3. 夢 その1 』 (@中学2年～高校3年のどこか。)

2006年10月17日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

—from diary of Ei Kiyomine.—

—8月1日—

—AM7:05当地着。現在位置詳細不明。気候・走行時間から考えて北海道～青森あたりか。質問するが解答なし。平野もしくは広大な三角州と思われる。—

—当着早々燎野さんと別れる。別れ際の態度不審。—

—朝食AM7:27。味も素っ気もないが栄養価計算されている。朝食後、西谷一尋（に七や・かずひろ）に紹介される。僕専属のトレーナーorマネージャーもしくは「実験体No.7, Ei Kiyomine」の実験分析—

—僕の監督のもとに—

「うえ～～……」

日頃の躰の良さもどこへやら、あてがわれた個室に1人とり残されるやいなや鋭は服を脱ごうともせずにベッドの上へ倒れ込んだ。

「疲れた。めいっぱい疲れた。4km遠泳のがまだました。ウ～～～～……」

人前での大人ぶった表情も全て放り出してしまう。

既に深夜に近い時限だった。あれから、朝食もそこそこに一日中、“健康診断”なる怪しげなものに狩り出されていたのだ。

（健康診断？ はっきり言って能力テスト以外の何物でもないじゃないか、人をバカにして）
ごろりと頭の下に手を組んで仰向けになりながら、この、年よりもはるかにませた判断力を持つ少年は考える。

見なれぬ精密機器類。指紋から脳波から眼底毛細血管に至る識別可能部位の厳密なチェック。IQや一般知識・科学的専門知識の審査はまあ許せるにしても、反射能力、運動神経、さらには一見、付き添い（コンダクター）風の男の世間話に見せかけた、性格・思想・深層心理の判定!!

鋭の気に障ったのは、むろん、そういった検査をされるという事ではなかった。そんなことはここ、得体の知れぬ組織“センター”へ来ようと決めた時から予測されてしかるべき事だったし、思ったよりはずっと扱いも丁寧だ。——鋭としてははなから非人格的なモルモット扱いをうける覚悟でいたのだから。

ただ、気にかかっているのは——……

（チェ、非科学的だ）

二日続きの緊張が育ち盛りの体をくたくたにしてしまったのだろう。鋭はそのままふっ、と吸

い込まれるように寝入ってしまった。

その夜……

——リョーノ！ やっと会えたね!!

遠くでの人の話し声が、深く眠り続ける鋭の心の中に響いて来た。

——待ってたよ、待ってた！ ずっとずっと……

——わりィ。遅くなっちゃったよな。

目をつけられるのに時間がかかって。

——そんなこと！ きみは——来てくれた。それだけで十分だよ。

——なんだ、疑ってたのか？ ひでえなァ、約束したろ。

「う、ん。誰……」 鋭は淀みに捉われたままかすかに身じろぐ。

「誰……」

——そう、だね。きみは、そうなんだよね。ホントに——

——あ、おい！ 泣いてんのか？ おまえ——疲れてんじゃないか？

——うん。でも、もう大丈夫だよ。何があっても。きみが、いるから。

きみが、いるから。そんなフレーズが、わけもなく頭の中をリピートする。

——さあ、あまり感傷にふけていてもしょうがないよね。

外のニュースを聞かせてよ。みんな、元気？ リーツはどうしてる？

——ああ。もっとも、おれもここ半月ほど会ってねエけどね。

ただ——おまえがいなくなってからあと、妙にあちこちに

緑衣隊どもがうろつきまわるようになってきた。

今のところ、大した事件にはなっていないが……

緑衣隊？ ……知らず、妙に気にかかる言葉に、少年の意識はついに深い淵を離れて上昇を始めた。緑衣隊——……何かしら、妙に凶々しい、不吉で昏い単語。

緑の——緑の服の——……

しかし、鋭がまだ彼の肉体（からだ）の呪縛から逃れ切れずにいるうちに、こんな言葉がかすかに聞こえてきて、とだえた。

——待って！ 誰か——誰かが、この“声”を聞いている。

——なに……？ おまえの他にも心話のできる奴がいるの？

——違う……こんな感じ……今までなかった。

——敵、か?!

——うん……違う……と思う……でも——……

——しょうがねえな、とにかく黙ろうぜ。

近いうちに直かに顔会わせる機会ができなけりゃ、俺の方で
何とか口実つけておまえの居る所まで行けるようにするよ。

あの白い棟だろ？ 何階？

——2階……でも、無茶はだめだよ。

——わーってるって。じゃ、な。

——うん。じゃ……

——おっと。ちょい待ち、

——え？

——あーいしてるぜ、ティ。

——ばっ☆ ……ばっ！ っっ

——……………

「——……夢、か。」

何がなし頬を染めながら、目覚めて鋭はそうつぶやいた。まだ最後の笑い声が耳に残っている。
。不可思議な夢——

だが彼はまだ心理学にはさほどの興味を抱いていなかったし、フロイド式に夢判断を試みる
には、育ち盛りの肉体の要求が強すぎた。

そして。

かけた覚えのないモーニング・コールに無理矢理たたき起こされた時、少年の心は既に昨夜の
夢を忘れてしまっていたのである。

翌日からハードスケジュールな毎日が始まった。学習、学習、ひたすら叩き込まれるばかりで
ある。食事と入浴以外、ほとんど常に何かを覚えさせられ続け（むろん睡眠時間にも）、日曜日
などというものは与えられなかった。それが半月以上続き、鋭の他の数人の少年達もほぼ同じ状
態におかれているらしく、友人ができるどころかほとんど口を利く機会すらない。彼らは皆一様
に青白い表情をしてノルマを果たすのに追われ、子供らしい遊びの欲求も若々しい応用能力も、
全てを封じこまれてしまっているようだ。

ただ、鋭だけはその中で一人異彩を放っていた。

その日からハードスケジュールな毎日が始まった。

鋭の連れて来られた所は、ここ、国立科学技術開発研究所、こと《センター》の西端中央に位
置する《教育・能力開発法研究棟》だった。北辺には心理・社会・情報・統計学関係の研究棟が
並び、南方には医学、薬学、生体科・化学、外科学関係、細菌学などの集中ブロックがある。
比較的高い場所からは、中央部の南北に走る電子技術・工学系の地区をはさんで東半部を占める
、地学・天文学・宇宙工学・原子物理学—— big science 系の巨大施設が点在する、驚ろくほど広
いフィールドを垣間見ることができた。

土地は平盤で、北西はるかに丘陵地とそれに続く山脈がおぼろにかすんで浮かんで見える以外

、《センター》の敷地も、その周囲に広がる廣野も、ほとんどと言ってよいほど起伏がない。まったく狭い日本のどこにこうも単調な景観が存在し得たのか、晴れた日に荒原の南端に輝やく細い銀環はどうやら水平線らしい、と、社会の授業のたびに科学雑誌を開けていたことを悔やみながら少年は考える。

鋭をはじめ、能力開発実験のモルモット兼《センター》のエリート候補生である子供たちは、3歳～17歳くらいの総勢50人ほどだった。

うち30数名は比較的年のいったたくましい少年たちばかりで、宇宙・航空力学系の試験飛行士としての訓練。残りの10余人が科・化学者の卵、平均IQ220の高知能児である。規律と罰則に基づくスパルタ式訓練で徹底した集団生活を営んでいるアストロノーツ・グループと違い、彼ら高知能児には完全なケース・バイ・ケース。個人指導主義がとり入れられていた。

孤人（こひと）

In Japan, there isn't a history of rebolution(?).

Though, Japanese can't give up the mind what statesmen are so great.

2006年10月19日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

緑衣隊——それは《センター》の警備や施設等の管理補修、肉体労働を全面的に請け負っている、ちょっと得体の知れない集団だった。

軍律厳しく、決して無駄な口を叩かず、音をたてない。隊員たちは一様に冷たく無表情で、身じろぎもせず《センター》のあちこちに歩哨として立っている姿は一種無気味でさえある。

帽子や胸の標識で、《センター》の広大な外縁部の警備、各建物内外の監視、独立研究者や視察官などVIPの護衛。3つのセクションにわかれている彼らの顔ぶれが時おり不意に変わるところを見ると、どうやら本隊は別の所にあって一分隊が任務の一環としてかわるがわる派遣されて来るにすぎないらしい。

姫君専属の緑衣隊員が鋭を迎えに来たのは、その日の夕刻遅く、彼に与えられている個室で西谷と翌日のミーティングをしている時だった。

自動扉を無断であけて、入って来るなりいんぎん無礼な無表情さで鋭に向って来意を告げる。気を悪くした西谷が今からでは明日のスケジュールに響くと不平がましく抗議したが、緑衣隊員がそれに注意を払わないばかりか最初から最後まで彼の存在そのものを無視し続けたので、インテリとして兵士を見下しているプライドをいたく傷つけられた。

鋭はそんな西谷と男とを見比べてしばらくためらう風だったが、再度せかされると大人しく立ち上がって部屋から出てゆこうとした。

「それでは」と西谷も神経質に眼鏡を押し上げながら立ち上がろうとすると、緑服の男は声も出さずに鋭い一瞥だけでそれを抑えてしまった。

《センター》の内外は昼夜灯火つけっぱなしが普通だが、この《教育・能力開発法実験棟》南翼は、3・4階が収容されている高知能児（モルモット）たちの個室にあてがわれていたために、精神衛生上の観点からかなり照明の光量がおとされていた。と、言っても少年たちが夜間廊下にさまよい出る機会など、ほとんどありはしなかったが。

「暗いですね。」

ところどころにある頑丈で小さな窓から相互にかなりはなれている周囲の棟の不夜城ぶりをながめやって鋭が云うともなしにつぶやいた。完全防音で夜になると自動的にシャッターのおりてしまう自室からはわからなかったが、雨だ。

「もうずいぶん長いことプラネタリウム以外で星を見ていないんです。前は毎日夜ぬけだして見てたんだけど、田舎でしたから」

「坊や、なぜこんな所にいるんだ」

突然、緑衣隊員である筈の男が低い声で激しく云った。

「——え、」

だがしかし、廊下のはずれ、エレベーターの前には明々と人工灯がとり、そこには緑衣隊数人の常時いる詰所があった。エレベーターの箱の中にも、2人。そして1階まで降りてしまうと、すぐその前が目的地だった。

「あの……」

「ここだ」

男はある1室の前で立ちどまり、インターフォンを押して鋭の到着を告げた。即座に「おはいいり」と少女の高い声が答える。音もなく自動扉が開く。

一歩、室内に踏みこむと、そこは殺風景な廊下とは全くの別世界だった。

冷たい色の壁と天井、色気もそっ気もない牢屋さながらの小さな窓こそ他の部屋と変わらない造りだったが、金属の床はぶ厚いじゅうたんで覆われ、カーテン、大きなタペストリーの壁かけ、木製の大机、天幕つきの寝台。天井には規制の照明の他に小ぶりだが、いかにも美しいシャンデリアが下げられている。まったく、ここへ来て1日2日でよくここまで改造できたと思うほどだ。

だが、それだけの金をかけていながら——いや大金がそそがれているが故に——一層、明るく照された部屋の中の一つほの昏い空気は隠しようがなかった。

「藤井、おまえはもう下がりなさい。ドアの前で歩哨に立つといいわ」

巨大な長椅子の腕に投げやりに上体を倒して少女が云う。と、少女のそば近くに膝まづいて何かしていたらしい、大柄な緑衣隊員が立って部屋を出て行った。彼らが何をしていたのかは鋭にはわからなかったが、室内に漂うかすかな嗅ぎなれない原始的な匂いに気がついた時、少年を先導してきた男の眼に一瞬閉じられた。暗い光が宿った。

「ふふん。遠野、今さら何を驚くというの」

少女の細い眉が皮肉に吊り上がる。

夜を知らない部屋の中で、しかし腰かけている椅子と同じく深い真紅色の部屋着をまとうている少女の細い胴は背景に溶けこんでいるかのようだった。ただ四肢と顔だけが紅い闇の中に浮きあがって見え、ごくゆるく重ねられただけの前あわせから半分ほども露わになっている、胸の青白さとのコントラストがいっそ痛々しいほどだ。

少女はそこに何かの象徴であるかのよう^に身を投げだしていた。

「遠野、お茶。クインマリー」

あいかわらず鋭という部外者の存在を無視してぞんざいに云う。命じられた大の男が黙ってカップをさしだすに至って、はじめて少女は上体を起こし、鋭に向きなおった。そうすると背すじが驚ろくほど真っ直ぐだ。

手にしたカップに遠野に言いつけてブランデーを入れさせながら、12歳の美少女・野々宮奈津城は驕慢に年下の少年を見上げた。

「座りなさい。座っていいわ。その椅子」

半ばカップの縁に紅い唇をつけそうにしながら、目だけで自分の正面の豪華な肘かけ椅子をさし示す。少年が大人しくその指示に従う。

その間に少女はこくこくと紅茶を飲みほしてしまった。

「待っていたのよ清峰。わたし退屈しているの。何か話をして頂戴。」

「え……」

無表情な子供の顔に初めてためらいらしい動きが現われた。

「まったく。高知能とやら称する子供がずい分集まったというから“これは”と思って来てみれば、何のことはないどれも泥くさい専門バカばかり。わたしの質問に答えられた最年少のおまえ1人とは《センター》のレベルも知れたものだわね……さあどうしたの清峰、何か話せと云っているのよ！」

「何か、って例えばどんな……？」

小女王の短気さに、お相手役は心持ち首をかしげてあいまいな頬笑みめいたものを浮かべた。

~~「ここに来る前には、院の小さな子たちをあやさなくちゃいけなかったんで、童話やおとぎ話の類なら、たくさん知っていたけど……」~~

~~「ドワ？」と少女は聞き返してから1人肯いた。「ああ童話、子供向けの話のことね。……それでいいわ。早く話しなさい。」~~

~~——結局のところ奈津城は暇つぶしの相手が入り用だったらしかった。鋭は2つ3つ童話や民話を話させられ、その後で理解不可能な彼女の文学・文化論をそれでも結構興味をもって行儀良く拝聴し、——初め奈津城は、少年が科学的な専門教育しか受けていないのを知ってだいが気分を書いたようだったが、勝手に話し続けるうちに、~~

「何でもいいわ。そうね——おまえのことを教えなさいよ。」

「、僕のこと?!」

今度こそ、少年は、予想外——という表情を形造った。

「ええと」——はじめての間投詞。

「フルネームは清峰鋭、推定年齢で10歳です。推定——というのは、実は僕は捨て児なので——」

いかにもしにくそうに話しだすのを、奈津城はフン、という表情で邪険にさえぎった。

「知っているわよそれくらい。清峰鋭。sex、メール。19xx年1月3日早朝、塔浦句県堅井中郡541-2、聖光愛育園門前にて発見さる……」

「調べたんですか？ 知っているんならなんで尋くんんです？」

「通りいっぺんの報告書の内容を読んだからっておまえを知っていることにはなりやしないわよ。」

「？ すみません。言ってることが、解らないん——……」

「じれったいわね！」

まだ手にしていたカップが、鋭の肩先をかすめて背後はるかの壁にぶつかる音がした。

遠野、と呼ばれた例の緑衣隊員が黙ってそれを始末しに行く。

「狂暴なんですね」

恐れをなすでもなく、そう——心底“キョトン”として——少年が言うのに、奈津城は突然愉快そ

うに笑いだす、という形で反応した。

「アハ、アハハ、おまえ——面白い。とても面白い子ね！」

それからは話はわりあいにスムーズに進んだ。

x

x

x

少年があくびをし始めているのに気づいて奈津城が許しをだしたのは、すでに11時を過ぎようとしている頃だった。

『 2. 過程 』（@中学2年～高校3年のどこか？）

『 2. 過程 』（@中学2年～高校3年のどこか？）

2006年10月16日 [連載（2周目・最終戦争伝説）](#)

1週間というものはあっという間に過ぎた。その間に鋭は自分で荷物を造り、部屋を片づけ、学校の先生と世話になった院生とにきちんとあいさつをしに行った。そのどちらも《センター》というものの存在を聞かされるのは初めてで、とりわけ鋭の天才に最後まで気づかなかった大の好い教師には鋭は自分の能力がどんな経路をたどって《センター》に知れたものか不思議に考えた。草深い地方の片すみにいるせいもあり、幸いマスコミ種になるような派手なマネをした事は一度も無かったのである。

院長は院長で、法律上の手続きとか称して妻と子を東京へやらなければならなかった。そのくせ彼は自分で市役所まで鋭の移転届を出しに行った。

最後の日に愛育園の中でささやかなお別れ会が開かれ、窓を開け放った食堂にジュースとお菓子、わずかばかりの花を挿した花びんなどが並べられた。

子供たちも職員も、当然、話し好きの院長が「はなむけのことば」を一席ぶつものと期待していた。しかし、院長は気分が悪いといって部屋から出て来ようとはしなかった。

予定より早く例の男が緑の制服のボディガードを従がえて迎えにき、会は盛り上がりえないままに解散となった。

「これ。」

「おちえんべいだよ」

「バッカ、おせんべつだろ」

「体に気をつけて。辛い事があつたらいつでも帰って来ていいのよ」

「みんなでお金出して買ったの」

ぎりぎりの瞬間に大きな紙袋が鋭の手に押しこまれ、口々の別れの言葉を少年はただ静かに肯ずいて受けた。

園に続く小道の向う側に、小型バスくらいの大きさの緑色のボディガードの制服と同じ色の車が待っていた。

「囚人護送車みたいね」

誰かが窓のないその型を評してつぶやく。

「早く乗りたまえ、清峰君」

男は鋭に後部ドアを指し示し、自分は前部のゆったりしたシートにおさまった。

鋭が乗り込むすぐ背後で2人のボディガードが左右から扉を閉ざす。彼らが前部の運転台に納まる震動が伝わったかと思うと見送りへの挨拶も残さずに緑色の車は走りはじめた。

（※緑色の「囚人護送車」の簡単なイラスト。）

背後からドアが閉じられるお急にひいやりし、ひっきりなしの蝉の声の途断えてしまったことが少年にかすかな異和を感じさせた。車内はそれこそ囚人護送車さながらの造りつけで、両脇に（つくりつけの狭くて低い）腰かけ。前半部とのしきりの壁についているひとつの他には——それとて非常に小さいうえにおそらく向う側からしか開けられない構造のようだが——窓もなく、紫白色の明るすぎる人工照明がスチールの床や壁に反射して、寒々とした非現実的空間を作りだしていた。

車が走り出してしまったので鋭はしかたなしに落ちつかなく手近かの椅子にかける。

しかし何よりも意外だったのはこの車室に既に先客が乗っていた事だった。

彼は鋭とは反対側のベンチの上にさも窮くつそうに横たわり、驚いたことには熟睡してしまっているらしい。今年9歳の鋭よりも確実に7～8歳は上だろうか？ 腕も脚も太く発達し、ケンカと云わずスポーツと云わず、反射神経の練度よほどのものであるだろう。ただその寝顔だけは未だに子供っぽい無邪気な気真面目さ、~~といったものをとどめていて、少し開いた口元の闊達ないたずらっ気などと共に現われつつある少年らしいほにかんだ優しさを~~ただその寝顔だけは未だに子供っぽい熱心な／無邪気な？／誠実さ、~~といったものをいくらかとどめていて、口元の闊達ないたずらっ気と共に少年の乱暴さ、生年の荒っぽさ、といったものを~~鋭に恐怖感を与えなかった。

「優しい野蛮人」——どこかで聞いた、そんな表現が思い出された。

車はどこか急な曲り坂にさしかかったらしい。幾度か左右にかしいだ挙げ句、特に激しくカーブを切った瞬間に、その少年はなにか寝言をつぶやきながら寝返りを打った。

「痛（て）っ!!」

「……うわ☆」

見事にころがり落ち、したたかに腰を打ったらしい。更に車の動きにつられて反動がつき、通路をころげて、鋭が座っている側のベンチの下に頭を突っこんでしまった。

「……あの、大丈夫……」

鋭が腰を浮かしかける途端、ガン、と鈍い音でベンチがゆれた。

慌てて飛び起きようとするあまりに頭上の障害物を失念したのだろう。こうなればもう、何をか言わんや、であった。

「ぐえ～～」

ところがそいつはようやくの態で椅子の下からはいだしてくると、もうけろりとした様子で、ひょいと元の席へ戻った。——あれあだけ手ひどくぶっつけたのに、こたえていないのかな……
鋭はちょっと目を大きくして彼の顔を見つめる。と、彼の方でもまじっと視線を合わせてきた。

「ヨ、ご同輩。おたく男、女？」

「え？——なっ☆」 ……絶句数秒……

「あ、わりーわりー、気ィ悪くしないでっっ」

彼は慌てて手を振ってつけくわえた。

「女の子だろーとは思ったんだ。ただあんまり髪短くしてるんでサ」

——鋭はもう、潰れてしまいたい気分——……

「いや～～、美人だねエ、ホント。ちょっとボーイッシュなところがまたかわいいよ。今度デートしない？」 彼は、本気であるらしい、どうやら。

「僕……男なんですけど」

「!!——悪い。」

青年が素直に謝ったので、憤慨というよりはまだ啞然、呆然に近かった鋭の表情も、さして長びかずにいつものポーカークフェイスに戻る。が、「でも、おまえ、ほんっとーに美形だぜ。あと4・5年もすりゃ女も男も放っておかなくなる」——と彼があまりに悪びれずに続けるのを聞いて、思わず微かな笑みを浮かべてしまった。

「しっこいんですね。でも、男もって、どういう意味なんですか？ ——女の子みたいに可愛い——とかは前にも云われたことがあったけど、面と向って間違われたのは初めてだし。第2成長期に入って体型が変わってしまえば、もうそんなことはないんじゃないですか？ それとも僕はそんなに女みtainな顔立ちをしていますか？」

「あっ、いやっ、そういう意味じゃない！ そういう意味じゃっ……っつ
ガキには通じない冗談なんだ☆ 忘れてくれっ」

彼はひとりでジタバタと赤くなっている。

「……へえ、……」

鋭は心持ち片目をすがめ、唇をきゅっと結んだ。

慣れた人にしか解りはしないが、何か新しいものごとに興味をひかれた時の、彼の癖である。——
彼がわずかなりと表情を表すのは気の許せる相手に対する時だけである。——

「ときに、オレ、燎野正明（りょうの・まさあき）。おまえは？」

「あ、僕は——……」

切り換え——と言おうか立ち直りの速いのがこの面白い人の特性らしいな——と頭のどこかでは冷静に観察しながらも、いつの間にか打ちとけた相互紹介に引きこまれている自分を発見して、鋭はためらいにも似たかすかな驚きを覚えた。

（「清峰 鋭 9歳」のイメージイラストあり。）

結局、好きな喰いモンは何かとか100m何秒で泳げるか——など他愛もないおしゃべりを続けるうちに鋭はすっかり相手に気に入られてしまい、幾度かちょっとした話題で議論した挙げ句、鋭の方でも青年の知性はかなりのものだと思認めざるを得なくなった。

鋭がまだ9歳だと告げると燎野はひどく驚いたようだった。

何時間かが経ち、2度停車して鋭たちは用を足すために車から降ろされた。どちらもただのドライバーなどとは明らかに様子を異にしていた。2度目の停車の際にアルミパックの弁当がさし入れられ、いい加減しゃべり疲れた2人は黙ってもそもそとそれを詰め込んだ。弁当というよりは軍用の携行口糧に近く、鋭は初めその開け方が解らずに慣れた様子の燎野に教えられなければならなかった。

~~「——今、何時ですか、燎野さん」~~
~~——食べ終わってしばらくして鋭はそう尋ねた。既に夜の8時を廻り、3度目の小休止があつて毛布を2枚、手渡されていた。~~
~~——「車の揺れ具合から推して、渋滞や何かにぶつかった様子ってありませんよね。ってことは、もうとっくに県境のひとつやふたつ、越えた頃だと思ふんですけど……」~~
~~——「そりゃ、だろうな。それがどうかしたン？」~~
~~——燎野は早くも毛布をひろげ、寝る仕度を始めている。~~
~~——「いえ。ただ、僕の越境届、自分で持っているんです」~~
~~——「オレだつてき」~~

3度目のやや長い小休止で2人は毛布を与えられた。スイッチを探しあて、車内を薄暗くしてすぐに燎野は寝入ったらしい。

鋭は狭く固い長椅子の上で長い間、寝つかれなかった。夏の盛りの宵の口だというのに毛布一枚では肌寒くさを感じる。

~~——月光の申を、奇妙に目だたない色の車は静かに走り続けていた。~~
~~——人気のない片田舎を縫う、一本の、白い細い道。アスファルトではなく、ただのコンクリとも、見えない。一本の道。~~
~~——その道に沿って、えんえんと幅広の草地が続いている。~~
~~——その意味するものを、まだ、誰も知らない。~~

x x x

翌朝、目覚めると目的地に着いていた。考えてみると鋭はそこが何処であるのかを知らない。
——車内から一步踏みだすと涼しく、真っ青な空がどこまでも広がっている。

「あばヨ」

軽く片目をつむると燎野はあっさりと離れて行った。

昨日の親しさが嘘のような——……鋭は何かそぐわない感じで、ボディガード達に伴われて去って行く後ろ姿を見送る。

「来たまえ清峰君。こちらだ」

例の男が少し離れてから呼びかける。「はい」

少年は無表情に振り返り、ついて行った。

ティシール / ティシーレ / ティシーリア
レティシーレ / レティシーリア /

燎野正明

真汝

沙姫子

冴夢

冴子

沙貴子

砂貴子

そう——「わたし／ぼく」は出られる。

※「檻の中の自由（ティシール）」のイメージイラストあり

『 清峰 鋭 (きよみねえい／リレキセス・ジュンナール) の物語 1 』 (@1995.04.08～) .

[『 清峰 鋭 \(きよみねえい／リレキセス・ジュンナール\) の物語 1 』 \(@1995.04.08～\)](#)

2006年11月30日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

うちの主要キャラクター(?)のうちでは最長寿の部類ではなかろうか? 惑星・地球の滅亡(文化・文明ではなく“星の”消滅だ★)を見届けているので、少なくとも億単位で、同一の肉体(うつわ)を使って生存していたことになる。その旅の全貌……なんてものは作者にだって謎のままである。はっきり言って知りたいとも思わない★

惑星《地球》、西暦1900年代の終盤の生まれ。正確には人類ではなく、“半神人”に近いが、本人がそれを知るのは成長して後のことだった。

父親は普通?の人類(ひとぞく)である日本人戦場カメラマンの磯原岳人(いそはら・がくと)。内乱中のアフリカ(もしくは中東?)奥地の岩砂漠において乗っていたジープごと地雷を踏んで遭難した彼を、偶然(ではないが)発見し、興味半分で救ってしまった水霊の末娘(アトル・ウルワニ)が、岳人の精神の毅さに魅かれ、水の太霊である母親の意志に背く——(人類の数え方でいう西暦1900年代、2つの大戦とそれに重複した自然破壊の深刻さに怒った水の太霊は、とうとう精霊たち全てに呼びかけて人類を滅ぼすべく行動を起こし始めていた)——と知りながら、人類と精霊との新たな契約の証として創り出した生命(うつわ)である。

磯原岳人は、近隣で活動中だったNGO『国境なき医師団』(たぶん☆)の看護婦であり、白の一族の娘でもあった第5の(ミーニエ)マリセに救われて日本に戻り、後に植民者連合(コロニスツ)世界を中心として歴史に名を残した磯原渣らの父親となる(これはまた別の物語である)。

水の末娘は、史上唯一の“水の息子”(アトル・ウルワー)の養育を、父親?の出身地である島国の、山中の清浄な(水が豊富ではあるが海=水の太霊の版図=からは遠い)町に住む人類に託すことにし、水の姉娘たちの密かな協力と加護のもとで、その子供は育つことになった。

人界の用語?で言えば日本の長野(山梨かも)の田舎町のはずれにある、キリスト教会付属の愛護園(孤児院)の玄関先で、生後まもない捨て子として発見され、その雨上がりの朝、町を見おろす南アルプスの峰々があまりにも美しく峻険であったことから、園長によって“清峰 鋭”と命

名された。質素ではあるが愛情と信仰心に恵まれた穏やかな環境であった。

その当時（西暦2000年代初頭）、日本国における政治？状況は悪化の一途をたどり、いまだ表面化はしていないものの、内部での武力によるクーデター（暗闘）の結果、『センター』と呼ばれる軍事（研究）機関が、多大な権力を握るようになっていた。

彼らは国民の総背番号化による動向の管理や、TVなど電子メディアへの介入（サブリミナル操作等）による思想の統制・方向づけを図ると同時に、優秀な素質を持つ子供を集めて早期教育を施し、次世代戦力の中核にしようという生体実験のプロジェクトを進行させており、その一貫として保育・幼稚園と小学校各学年における知能テストの普及強化が行われた。

清峰鋭は、乳幼児のころから異様に泳ぎが得意で、水難事故にあっても平気で生還するわ、寒中水泳に参加させれば何時間でも喜んで雪の降る海に潜っているわで、周囲の大人は少々肝を冷やすが、それ以外では従順で善良な性格の、おとなしい（無口な？）子供として、むしろ目だたないように振る舞っている。早熟で高い知能と人格とを持っており、小学校低学年にして大人の新聞を平気で読みこなし、園長名義で図書館から専門書を借りてきて読みあさるなどの芸当も、誰に教えられた訳でもなく弁えていた。

が、どうやらこれも謎の人物で、政治？の暗黒部分？の情報を、ある程度もっていたと覚しい園長の忠告に従って、その発達した知性を外部には漏らさないよう、注意して行動する習慣を身につけていた。学校のふだんのテストはもちろん、『センター』による統一知能テストでも、“やや利口”以上の点をたたき出すことがないよう、計算して解答していたフシがある。

しかし近所のマニアックな理工系の大学生と、ついうっかり“対等な”友人づきあいをしてしまった結果、口コミでその存在が『センター』に知られてしまい、『早期教育プログラム』の対象者として育った町から引き離されることになった。逆らえば園長の地位に圧力がかかり、つまり愛護園のほかの子供たちが行き場を失う事になるという脅しを受けて、やむなく『同意書』にサインを取られ、泣き伏す園長に簡単な別れを告げただけで、鋭は『センター』さしまわしの護送？車に乗せられた。彼本人の感覚から言えば、この時が、すべての“旅”の始まりとなっている。

これに間一髪で間に合わず、地団駄を踏んだのが『朝日ヶ森』の行動部隊である小学部の子供たちである。清峰鋭の天与の才については、『朝日ヶ森』関係者？である園長から早いうちに報告？がなされていたが、息子同然に愛情を注いでいた園長が、できれば手元に置きたいと望み、本人もそれに同意していた為、『朝日ヶ森』への編入は中等部以降という話になっていた（らしい）。が、『センター』の調査が身边に及んでいると察知した『朝日ヶ森』が、しばらく迷った後に迎えの部隊を出した、その一足違いで、身柄を拘束（ほとんど誘拐）されてしまった訳である。

この迎えの部隊の謎の行動にひかれて救出作戦に同行したのが、清峰 鋭 に淡い初恋？を抱いて

いた同級生（小学4年生）で、当時は事故で両親を失ったショックにより言葉を失くし（全完黙症？）ていた楠木律子である。彼女には、その両親にからんだ別の物語において精霊族の不思議との関わりがあり、その血筋と才を見いだされて、救出作戦の後、『朝日ヶ森』に編入の運びとなった。後の『朝日ヶ森』第？代理事長である楠木女史その人であり、清峰 鋭 の息子（アトルヤー・アイラーヤム）を産んだ高原律子（たかはら・りつこ）を『朝日ヶ森』大使？として大地世界（ダイレムアス）に送り込んだ、実の祖母であり養い親でもある。

鋭は『センター』の北海道支部？へ護送の途中で、同じ車に乗り合わせた『朝日ヶ森』からの少年スパイ？、燎野（リョーノ）と知り合う。実験体として『センター』に捕らえられた精霊族の血をひく友人、ティシール・ティシーリアを救出する為に無謀とも思える『センター』侵入を敢行した彼は、ティシールとの再会を果たした後、脱出に失敗して二人ともに落命した。

この時、『センター』側の実験体として合成されながら、長じて実権を握る（少なくとも権力闘争で互角に渡り合う）までに成長していた少女（コードネームは無津城（NATSUKI））が、同年代の唯一の知り合いで、あるいは恋心が芽生えていたのかもしれない燎野の逃亡を助ける為に『センター』を裏切る行動をとり、絶命させられた。

彼女の生体脳を取り出して機械脳にリンクさせたものが後々『センター』の中枢頭脳としての役割を果たすが、ナツキの亡霊？の意志によって、キーワード『リョーノ』を知るものなら誰でも最優先で命令を下す事ができるという裏プログラムが付与された。

（このプログラムによって杉谷好一・当時13～4歳？が会田正行に命を救われてしまい、結果として23世紀の地球文明の命運を分ける事になった。また、このパスワードを知る者が21世紀半ばで全滅？していた為、忘れられたまま消されることもなく存続しており、23世紀に入って再び杉谷に活用されている）。

この時の騒動に乗じて清峰 鋭 は『センター』からの自力脱出に成功したため、結果として楠木律子と同行していた『朝日ヶ森』救出部隊とは行き違う。

北海道は帯広南部？の川から下って海をわたり本州の北部まで？、ほとんど泳いで！（ほんとか～っ!?!）、逃避行を続けた彼は、さすがに体力？の限界を極めて行き倒れ寸前のところ、別の目的で山中を移動していた『朝日ヶ森』の有澄真里砂（ありずみ・まりさ）（大地世界（ダレムアス）での名称は皇女マーライシャ）らのグループに拾われ、何とか無事に『朝日ヶ森』へと辿り着いた。

そこで半年ほど休養を兼ねて学生として暮らした後、文系？である『朝日ヶ森』の姉妹校で、スイス？にある理工系の『アロウ・スクール（仮称）』へ転校（国外逃亡）するのが本人の希望であったが、直通の密航船が来るより早く、皇女であるマーライシャの迎えの魔法？に巻き込ま

れて大地世界へ抜けてしまった。この時、地球年齢で11歳ぐらいであった。

『 (仮題) 流浪の民 ・ 構成・設定Memo 』 (@中学2年～高校3年...だと思
う☆)

『 (仮題) 流浪の民 ・ 構成・設定Memo 』 (@中学2年～高校3年...だと思
う☆)

2006年10月13日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\) コメント \(1\)](#)

第1章 ナツキ

第2章 ティシール

第3章 律子

第4章 緑の炎

or

第1章 ティシール

第2章 逃亡

◎ 全体のテーマ； ~~無感動な氷の子・鋭が~~
~~皮肉っぽい“コンピューター”に~~
~~成長するまでの過程~~

~~6月・ナツキ、《センター》へ。鋭 (10歳) に会う。~~

~~8月・鋭、外出日に正明に出会う。~~

~~――・ナツキ、鋭の記憶力を知りショックを受ける。~~

~~――・姫小路と同衾のところに鋭に見られる。~~

~~9月・鋭、ナツキに教えられてティシールに会う。~~

~~――・スインセティッター・コンピュータ完成。~~

~~――~~

~~(オムニバスにするか、長編にするか?)~~

ナツキ

リツコ

鋭

ティシール

燎野

森の少女

アイン・ヌウマ

朝日ヶ森

旭学園

緑衣隊

《センター》

国立科学者養成センター

聖光愛育院長

第1章 起承転結

- ・ ナツキと鋭の出会い 邂逅
- ・ ののみやなつき。 展開
- ・ なつき、鋭をにくむ。 破局
- ・ 終焉 終焉

2006年10月14日 連載（2周目・最終戦争伝説）

「——《センター》へ行くわ。手続きをしなさい、北沢」
報告書の最後の行に目を通し、既処理のマークを押しながら云う。

「視察ですか、何日ほど」

「引っ越しよ。当分むこうに居つくわ。出発は明後日。」

「承知しました」

北沢は軽く一肯してすぐに出て行く。身長190cm近い、瘦身の、有能な男。

「.....なにか不服でも?! 遠野!」

うっそりと部屋の隅からこちらを見ているのは、いつもこの男の方だ。

「.....別に。」 低い声でぼそりと答える。

「だったら、早く行って、あたくしの荷物をまとめなさい!」

あたくし、野々宮奈津城（ののみや・なつき）。表向きは旧華族・野々宮家の唯一の嫡子という
ことになっている。表向きは。

精子銀行というのは知っているわねでしょうね。そう、米国の、ノーベル賞科学者とIQの高い
女性とを人工的にかけあわせて、優れた資質を持つ子供を得ようという実験機関。

あたくしも、それに似た団体によって造られた。純国産で——つけ加えて云うなら人工子宮成功
例の第1号。生粋の、試験管ベビー。

この事は物心つく以前から知っていたように思う。

なにせよチューブの中で、まだ大脳が形成されるか否かという時期からはじめられたあたく
しの早期全人教育

「う、うっわ～～お。おわお!」

おれ、あくびしてやる。めいっばい思いっきり。い～い気分。

なんつったって休日だもんな。もろ、ひと月ぶりの。なんにもない日。

× × ×

朝おきて顔を洗ってマラソンして朝ご飯を食べて歯をみがきました。

—(あ、おれ正明ってんだ。よろしく)—

で、いつもならこの後「訓練開始!!」つつうがなり声が響く。……はずなんだけど今日は休暇なんだよな。さて、何するベエ。おとなしく基地ンなか探検したってもいいんだが、きのうの今日なんで、やめた。

やっぱ外を見てこよう。

てんで外出許可証とりに廊下へ出る。

うえ、いつも思ってたけどこーやってちんたら歩いてみると……ひで一所だね、ここは。上から下まですべからくこれ人造！ もろ直角と直線と——おまけにブルーグレーと銀色ばっかだぜ、見てるだけで寒い。

と、角をまがった所で人間が2人。

「お、おたくも外出？」

ガキの方——細っこいんだぜ、これが——来るとき車でいっしょだった奴。

「燎野（りょうの）さん。」

心もち首かしげてこっち見上げる。

「わお。覚えててくれたわけ、感激」

……すこ〜〜し、苦笑？ ホント表情のとぼしいやっちゃ。

「……そりゃ、覚えますよ。一度聞けば」

おれ忘れたぜ——、おたくの名前。

「清峰くん。そちらは？」

神経質なんだが気が弱いんだか、のぞいただけで目、まわりそうな眼鏡かけた男。まだ若いな〜〜清峰——あ、鋭——ったっけ？ のオブザーバーらしい。

「あ、おれ……」

「燎野正明さんです、西谷助手。多分宇宙飛行士（アストロノウツ）訓練生——なんだと思いますけど。正明さん？」

「あ？ うん。おたくは？ やっぱ高知能児なわけ？」

「——ええ。」

「清峰くん。」

西谷・青白きインテリ氏がかたい声をだす。

おーおー、わーってるよ。《センター》の独立研究助手としちゃ、大事な大事なモルモットちゃんにはあまり雑菌を近づけたくないわけ。

「じゃな。」

まだ話したい気もしたけど——ひょいと片手上げて別れる。

「ありゃ、何してんだよ、おたく」

左翼の実務室で外出許可と通行証を手に入れて、戻ってきてみるとボーヤがまだいた。この間約30分。ひとり、だ。

「……西谷助手が……」

少し困ったみたく笑う。

ここ、今いるところは、おれが放りこまれた《教育・能力開発法実験研究棟》で、
エ長々しい名前の建物の、一階中央。廊下がちょい広がってエントランスになってる
、棟の出入口にすぐtの場所だ。ブルーグレーとシルバー一面のすみっこに、

× × ×

「ありゃ、何やってんだよおたく」

左翼の実務管理室で外出許可証と正門（ゲート）の通行証を手に入れて、鼻唄まじりに正明が戻ってきてもとみると鋭がまだいた。西谷助手とやらはどうしたものか、ひとりつくねんと壁ぎわのイスに腰かけている。

2006年10月25日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

○ 邂 逅

《センター》というのは、正確には国立科学者養成学校 (J.S.E.S.) のみを限定して指す言葉ではない。同じく国立の、広大な敷地と予算・人員とを持った科学・技術開発研究所——科技研——全体をもひっくるめて云うのである。正しくは、《センター》の中に2つのセクションがあって、それが実験室の集合体である“科技研”とその将来をになうエリート研究員の養成所たるJ.S.E.S.である——と説明する方が速い。

したがって科学者の卵たちの授業の何割かは実際の研究の一端を担う——といった形の実地演習として行なわれ、また既に《センター》の研究員として働いている者が、時間をやりくりして専攻以外のジャンルを習得しようとするのもさして珍しい事柄ではなかった。そういった手合いも含めて、J.S.E.S.には現在10歳前後から30代半ばまで、約200人近い学生がいる。彼らは主として理数系統の学問——地学・天文学・宇宙工学・量子物理学等のビッグ・サイエンスから医学・薬学・生体工学・ソフトウェア・ハードウェアに至るまで——をそれぞれの適性・指向に合わせて選択し、徹底的な専門・集中教育をほどこされるのだ。

いくらかは人文科学・社会科学系統を志す人間もいるのだが、これも最終的にはデスクワーク中心の専門バカになってしまうという点で大同小異だった。特にこの分野では、《センター》は有機的組織の編成・管理法に関して、目覚ましい成果をあげ得ていた。

「…… 《センター》へ行くわ。手続きしなさい、北沢」

報告書の最後の1行に目を通し、既処理のマークを捺 (お) しながら云う。

「視察ですか、何日ほど」

「引っ越しよ。当分むこうに居つくわ。出発は明後日。」

「承知しました。」

北沢は軽く一肯してすぐに出て行く。慎重190cm近い、瘦身の、非常で有能な男。奈津城 (ナツキ) への忠誠心に少し欠けるとさえ思える、だからこそ信頼のおける、筋金入りの武人。

「——なにか不服でも!? 遠野!」

うっそりと部屋のすみからこちらを見ているのは、いつもこの男の方だ。

「……別に。」 低い声でぼそりと答える。例によって百万言も不平をためこんでいるのは目に見えているというのに。

「だったら早く行って あたくしの荷物をまとめなさい!」

ダン!! ぶ厚い書類の束を机の上でそろえて、ひきだしに放りこむ。

「わかりました」

いんぎん無礼きわまりない大時代的な辞儀。それから無愛想に背をむけて、皮肉にゆったりした足どりで歩き、扉をあける。

「お待ち。」

イライラと爪を噛みながらにらみつけ、よっぽど怒鳴りつけてやろうかとも考える。それからひと呼吸おいて気を鎮めて、

「これはもう下げていいわ」

傍らの盆を指さす。

遠野はかすかに微笑したようだった。比較的小柄で横幅のがっしりした、山男めいた印象を与える彼である。素早く歩み戻って来て飲みさしの茶器を取りあげた。

「ナツキさま。」

他には何も云わず、ただそう呼びかけただけで男は一礼して部屋を出て行った。

「……まったく。妙な男!!」

奈津城と呼ばれた彼女はまた新たな書類の束を取り出すと、判や文献などを片手に手速く処理を始めた。

野々宮奈津喜——実はまだ13歳のほんの少女である。没落の一途をたどる旧華族・野々宮家の、戸籍上の唯一正当なる嫡子。

そして、《センター》にゆかりの子供だった。

精子銀行、というものをご存知だろうか。1900年代も後半になってU.S.A.にて設立され、ノーベル賞科学者の精子と遺伝的に優秀な女性の卵子の人工的なかけあわせ実験を行う、一種非人道的でもある研究機関のことである。

《センター》でもそれに相前後して、純国産で極秘裡に同種の実験が行なわれていた。

そう、野々宮姓を名乗るこの驕慢な少女は、その生きた実験結果であり、数少ない成功例の一人だった。消えゆきつつある旧家の当主・野々宮子爵は、借金のカタに実の妻の生殖機能を売却したのである。世間体のために書類でだけ実の子としてナツキを扱いながら。

野々宮奈津城を成功例であると書いたが、実際にはそれが成功であるのか、失敗であるのか、判定が難かしいところだった。IQで云えばその異常なほどの高さは確かに成功と言えた。が、優れた後継者、より有能な科学者の出現を期待した当初の実験目的からすれば、《センター》としてはナツキを全くの失敗作と断定せざるを得なかったのである。

おそらくは卵細胞からの影響をより多く受けてしまったのだろう。

奈津城は、小児期から今日に至るまで、自然科学的なものに対しては一切の興味も適性も示そうとしなかった。彼女が激しい魅力を見いだすのは芸術作品に対してであり、哲学や思想・複雑に入り組んだ政治状況などにであった。その生まれつきの自負心は己れを意に染まぬ方向へ誘導しようとする環境に、あえて順おうとはさせないようだった。

以上のような推移から9歳の冬にこの早熟な少女は戸籍上の実家へ帰されたのである——莫大な養育金つきで。

そして無能な義理の父から家政の権限を奪いとるや、世間一般からは注意深く自分の姿を隠したまま、傾むき切った野々宮の財政を奈津城はたちまちにして建て直してしまった。

更に4年。

少女は次第に大きな力を身につけつつあり、それにつれ、何か莫とした野望めいたもの、大胆な計画が、心の奥底で形を成し始めているのが彼女自身にもはっきりと解るのだった。

「……ふん。」

自ら指定した、出発の日の朝である。北沢も遠野も昨夜のうちには全ての手配をおえていて、あとは主人が出掛ける気になりさえすればいつでも出られる状態。待機時間である。

それでもゆったりと優美な細い肢体をソファに埋もれさせて、奈津城は遅れて届いた最後の書類に目を通していた。——これより後のものは直接《センター》あて転送されるよう、手筈はついているはずだ。

片手に紅茶のカップ。

「この前打った手はどうも無駄になってしまったようね、K物産の株は上昇一方。野々宮K.K.系列のかなりのダメージはこの分だとふせぎ切れないでしょう。——北沢！」

「は。」

「後で古物商の大井戸に電話を入れて、3日以内に例のものの買い付けを始めるよう云っという頂戴。……いつまでも杉谷の好きにさせときゃしないわ。」

最後の部分は独言で、少女はつぶやきながらペロリと血の色の唇をなめる。対象的に色の薄い淡桃色の舌が、未だ子供の体型から抜け切っていない美少女の顔に、奇妙に妖艶な表情を与える。双眼が光をはじめてきゅっと細められる。

狩るべき獲物を与えられた時の、野性の猫族の微笑み。

「出掛けるわ。遠野、上着を」

目的地までは専用のジェットで3時間ほどだ。

2006年10月26日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\) コメント \(1\)](#)

× × ×

《センター》の広大な敷地内の西半部中央、J.S.E.S.系の建物の集中しているエリアのひとつ。周囲のものよりも比較的小規模な“教育・訓練法開発棟”の一角に、ひとまず奈津城の個室はしつらえられていた。

8077のNo.のある、白亜の建物の最上階・4階である。

一旦、用意された部屋をのぞいた後、準備を整えた係員に2・3の指示を与えて再び奈津城は階下へおりた。

No.8077棟1階。エントランスからは少し離れたロビー部分の奥、一段高まったところにちょっとした自給カフェテラスが仕切っている。

完全な自販制で色気もそっけもない。とは云え《センター》内では特権階級ともいえる独立研究者（ドクター）と独立研究助手（インターン）・制度的にははるか下位だがいざという時には実指揮権を握る警備要員・緑衣隊の士官クラス、そういったエリート専用のエリアである。調度や設備には相応の金がかかっている。

品も上等で種類も多い。

奈津城はためらわずにそこへ入って行った。

別に茶を啜みたいというのなら自分の部屋で仕度させれば良い。それだけの設備や物はそろっていた。ただ、奈津城は自室へ慣れない人間が入っているのは好まないのだ。部屋の中を手直しさせておくために人手が必要とあれば、自分が出て行く。

そしてカフェへ出向いたのにはもうひとつ別の目的があった。

デモンストレーションである。

奈津城の後には、数歩はなれて、それが本来の彼らのコスチュームである緑の隊服をつけた北沢と遠野がノーマル装備で従がっている。北沢の胸には上級指揮官の徽章。——日ごろ奈津城の命令で私服をつけるように言われてはいるが、彼らも緑衣隊員であり、《センター》内や緑衣隊司令部その他におもむく折には制服に戻る。

彼らは護衛兼側近参謀としての任に着くようにと奈津城のもとへ派遣されているが、主人の行動と緑衣隊との利害関係いかんによってはためらいなくこの少女を撃殺する可能性もあるのである。

今は上部からの命令は“野々宮に従え”であったが——……

そんな部下2人を従えて13歳の少女はカフェテリアへ足を踏み入れた。

結構広い部屋の中にざわっとざわめきがおこる。

デモンストレーション。さっきも云ったようにこのカフェはエリート専用のエリアである。エリート候補たるJ.S.E.S.の教育・訓練生たちもまた別の理由から立ち入りを禁止されている。——彼らは徹底的な生活管理の一端として摂取栄養量を規制されているので。

奈津城は落ちついて中央やや奥まった席に腰を降ろし、（人間の本能としてこういう場所では壁際から埋まってゆくのが常である。——この時、人の入りは4分くらいのものだった。）北沢にブランディティー・ロワイヤルをとりにやらせた。

幸い座っている連中の大半はまだ若い独立研究助手（インターン）と、彼らに従がって特権階級のエリアに立ち入っている平研究員ばかり。ここには緑衣隊員も歩哨に立たない。

1～2分のうちに、若い——といってもJ.S.E.S.からたたきあげて10年このかたは《センター》に住んでいる連中の間に、5年前実家に戻されたあの天才少女の記憶がよみがえってきた。

帰ってきたのか?!

まさか。科学分野への関心値のあの低さを覚えてるだろう。

第一、J.S.E.S.への復帰なら、あんなに堂々としてここへ入ってこられる筈がない——……

様々な推測、個々の思惑がそちこちのテーブルの間でとり交される。

奈津城は頃合いを見はからって北沢に用を言いつけて一旦退出させ、遠野に紅茶のおかわりと軽食をとりにやらせた。

暫時、少女はまるで無防備な存在になる。

「やア、ナツキちゃん——いや、もう奈津城サンとお呼びすべきかなア。ズイ分大きくなりましたネエ。」

予測通り、席をたって話しかけに来る者がある。奈津城は上品に首をまわして声の主を見る。見るからに軽薄そうなこすっからい様子をした男——しかしこの男の、本人もいかに無心げに見せかけようかと苦心している笑い顔にだまされてはいけない。

「……まあ。イチガネさん、でしたわね。お久しぶりです。お元気そうでなによりですわ。——いかがお過ごしですか?」

確かに少し早熟気味であり、異常なほどの聡明さをそなえてはいるが。そこにいるように思われるのは上品で育ちの良い、どこから見ても純真無垢な幼ない美少女の見本である。小王女像、と云っても良いだろう。しかしかつてのJ.S.E.S.生活中、世間なみに考えれば学齢に達したかどうか——という奈津城の将来性を早くもねたんでこの壺金という男がどんな陰惨な手口で彼女を潰そうとしたか、都合よく忘れてしまっているほどのお人好しだなどと思われては困る。どころか、何年何月何日の何時何分にどこでどんなチャチな悪事を働いたか、どういう汚い手口で前任の研究助手を陥れて今の地位を手にしたか。この男の動静くらい尋ねるまでもなく、少女は全てを把握しているのである。

いいですかネ、など見かけは丁寧に尋ねながら、返事を待つまでもなく壺金は奈津城の正面に陣どった。しきりにしゃべりまくるのはこのテの男には共通の態度だろう。存在感の薄さ、中味の頼りなさを、騒音によって補なおうとでも云うのだろうか。

戻って来た遠野からトレイを受けとりながら、にこやかに、あでやかに、奈津城は壺金にむけて頬笑みかけた。この男がうまくこの場に居あわせたこと、最初に声をかけて来たのがこの男

であったことに対して神に感謝でもしてやりたいような気分になっている——彼女は無神論者だが。

「……そんなワケで、まァ長年コツコツと地道にやっていたのがむくわれましてネ、独立研究者（せんせい）のおかげサマで今ではいっぱし、独立研究助手（インターン）として大きなカオをさしていただいでる、とこんなワケなんですヨ。」

実に残念そうに壺金は長広舌にピリオドを打った。

「まあ、すばらしいですわ。出世なさいましたのね」と奈津城。

「いや、なに……」男のニキビだらけの鼻がピクピク動めき、途端、奈津城は口の中の食物を飲み下すのが困難になった。

あわててハンカチで口をおさえ、瞬間的な吐き気をこらえる。

「おや、どうか。顔色が青いようですヨ。」

「……なんでもありませんわ。慣れない飛行機で着いたばかりなものですから」

主人のもくろみや内心を知ってか知らずにか、慄然とした表情のまま遠野は待機の姿勢を崩さなかった。

「——ところで、あなたはここで何を？」

壺金がようやく本題に入ろうとする。

((、しらじらしい))

奈津城は人畜無害な愛らしい微笑を浮かべたまま内心苦々しく毒づいた。

通常、ある存在の動静に関して もっとも詳しい情報を握っているのは それに敵対する者であると云われている。

《センター》屈指の有力者でありJ.S.E.S.関連プロジェクトの主要推進力でもある……

(未完)

(借景資料集)

(執筆日記)

(執筆日記)

リステラス星圏史略

新資料ファイル

5 - 0 - 1

『 始まり の 物語 』

<http://p.booklog.jp/book/127114>

講談社【メフィスト賞】投稿用！

(2019年5月25日～)

著者：霧樹 里守 (きりぎ・りす)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/127114>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト